

形の良い目が開いて、厚い下唇は少しだけ上向きにめくれている。身体全体で女の盛りを誇り、豊かな肢体をこのように見せつけている。そして今が盛りの二十歳の後半なら心の贅では盛りの終わり、しおれの明日を怖れている。サキはアキコを、少しだけ意地悪く見た。

見上げているのは玄関タキが通路よりも五センチほど高いため、見上げるアキコの顔が輝くのは花束を喜んだのではない、空の星の影が額に斜めに差し込んでいるからだ。身体が豊かに見えたのは、膨らみの目立つ胸シルエツトときつすぎるタイトスカートが太股を見せびらかしているからだ。

アキコは、金曜の夜にバラの花束を贈られた幸せな女として、その肉付きを遠慮もなくただ豊満に露わにしている、とサキが見て取った。「翔にも、そんな風に幸せとか女っぽいところを見せつけている」

受取伝票を手にサキは一步前に出た。笑みを絶やさずにアキコは伝票を手にとった、サキの首から下げられている店員証に、確かめるともなしに目をやると名は「サキ」、手に取った伝票は北山台花店と書かれていた。サインするペン先が止まった。

木暮源治の花店である。

冷たい口調で電話に対応した店員は源治の娘で、聞き覚えがあったと耳が感じたのは、あの時のかすれた声で配達員、サキの聲がまさに同じだった。

喫茶店で翔が口に出した、姓は語らず名前だけその名はサキ。するとサキは源治の娘で翔のイトコ、そして翔を誘惑している美しい少女。全てが整合している。そのサキが松木の花束を配達に来た。一ほころびの微笑みを見せずに玄関前に立つ。

ペン先を止めアキコはサキを見た。

先ほどから、動きもない視線をアキコに当てていた。互いに突きあう女二人の眼差しが、花束を越して交錯し花卉に乱れて絡んだ。

サキの瞳が銀色に灯り、アキコの目じりがきらめきに黒く切れた。目の火花で二人は争った。

たじろいだのはアキコだった。あまりにも陰しいサキの目つき、そして青く透き通る白い頬。紅色の唇はバラの花弁に似ているもの、きつく閉じたまま。喫茶店の中空に一瞬の浮かんで消えた幻影と、目の前のサキは同じに冷たい表情、固い姿態だった。

想像していた姿態、表情に違わぬサキが、予告もなしに玄関前に

出現したアキコの驚き、そして敵意を込めた銀色の目にたじろいだ。「アアー」とはアキコの叫び、血の気が下がって目の前が霞み、サキ姿が夜の視界ににじんで消えた。膝から崩れ、玄関タタキにしゃがみ込んだ。

程なくしてアキコは意識を取り戻したが、立ち上がる気力は失せた。立つサキ、しゃがむアキコ。見下げていた位置が見上げる座に落ちた。そしてアキコから輝きが消えた。

「アキコさん、どうなさったの、すっかりして」

差し伸べられたサキの手にすがり頼に寄せてアキコは、

「疲れていたからよ、でも平気。あなた北山台の花屋さんね、遠くから来たのね」

「依頼主様は今夜中に配達して欲しいとのご注文でした。定時の配達は明日となる時間帯でした。それで直接にお届けしました。私が切り束ねた花束なのでお届けまでしたかったです。」

贈られる方を一目だけでも見たかった」

「私を見たかったのね、でもなぜ。私になんの感心があるの」

「島田明子様とは素敵なお名前、この花束を受けるその明子様に会いたいと願いました。花弁の大きさも色の組み合わせも、黒バラ花達をこうして偏心して封印したこの配置。」

全てアレنجジして、それをうける方が誰かと私が知りたかった」

「サキさんと言うのね、あなたこそ素敵なお名前。この花束はあなたが作った。急ぎの配達ありがとう。とても気に入ったわ。」

「ご依頼主さんはここまで黒いバラは松木さんが選んだのですか」

数輪を差し出したら気に入りました。その時小さい声で花の色はあ

の人そのものだとおっしゃいました。

贈り先様は黒バラを贈るため、黒バラの全て、そして深紅は黒バラの引き立てともおっしゃいました。それら全てを買い占めました」

サキの説明は途切れなく乱れもなかった。その時の状況、買い手松木と売り手のサキの対話を正しく表現していた。だからこそサキの言い分にはバラの棘、言い方に引っかかりが潜むのをアキコは知った。

松木の反応を語るのはあえての悪意で、それはサキの作戦と疑った。

ブラウスの赤が綺麗と言われて、目くじら立てる女性はいない。しかしその赤はあなたの行動よ、性向よ、あなたの人格そのもの。指摘されたら困惑する。あくまで主は個人の「私」なので、赤は「人格」を飾り立てるだけの従属である。

言い回しに淀みないけれど、人の個性と花の色を対照し個性を花の色に閉じこめて眨めたサキ。アキコは反発したのだ。

松木事務所でのアキコを襲った屈辱。息を殺しての抵抗で、身体のねじれの苦しきのあまり抱擁を受け入れたアキコのゆがみ表情、それが愛しいとせめた松木の本音は、性器の勃起に収斂した。全てが密室に秘匿された。秘密舞台が閉じて、たったの二時間しか経過していない。

自室に戻って余韻の甘さをかみしめて一人でまどろんでいたアキコ。その時間帯に松木は北山台の花店に立ち寄り、黒いバラを選び、この色はあの人そのものだと言った。

松木の喉の苦しい声をサキが聞き止めた。花束の香りを狂おしい香りをむさぼった松木の光景は北山台店先で展開され、全てがサキに目撃された。

タタキにしゃがむアキコの顔の疲れ。ほつれに乱れた髪と服装は夜の花束の代償と見破られた。そこに秘められた暗喩は、愛と秘匿かもしれない。それと気づかれたなら、事務所での秘密もサキに暴き立てられる。アキコの花園を乱す狼藉者はサキ、そしてサキは樋田翔に言い寄る。

サキは私が誰かとも、そして翔との特別のつながりにも気付いている。アキコはサキを見上げた。飾ってあった花束から黒ばらを一本引き抜き、サキに示した。

「黒いバラ、あなたにこそ似合うわ、この枝をお持ち帰って」
「この色は私には似合いません、あなたこそその黒バラです」サキの本心は黒バラへの白の拒絶だ。

マンション廊下を跳ぶように走り去った。後ろ姿はすぐに消えた。アキコは自室に戻って、問いを己に重ねその答を畳み込んだ。

「彼女は花束配達に来たのではない、私に挨拶に来たのよ。あなたは松木さんの愛人ね。そして樋田翔は私、サキのものと言うために。乱れた私の髪の毛つれ、太股あたりのスカート皺、それらを見てせせら笑ったわ、私を黒いバラと蔑んだ。」

翔と橋の上で胸を合わせたわ。見つめあう目に目が重なって、その目を離せなくて抱き合っただけ。接吻を、楽しんでわ。でもそれだけ。抱擁するのが愛なの、いいえ愛ではないわ。熱い接吻が愛なの、いいえそれだけでは愛にならない。

二人が離れた後、なぜか唇がじっとり濡れてジャージの袖で何度も拭いたのを思い出した。

翔との交際を軽い遊びと無理に決めつけても、小胸にわだかまる切なさの風を軽い遊びと無理に決めつけても、濡れた唇は翔のおかげ、何をし

ても他の人とは唇は濡れない。想いまで捨て去りきれない。

「このままでは翔は私から離れ、サキに取られる。」

二人は道を誤る寸前まで進むけれど踏み外さず奈落に落ちない。その難局に私
が教える、潔く穴におちるのよと、ねっとりあの子に愛を教える」

配達終わって店に戻る車内、サキはアキコとの対話を思い返して
いた。

「突然の配達なので驚いた。」

仕事の服装のまま現れた、金曜日の夕方、仕事の疲れが見えて
いた。それだけかしたら、目に隈が見えていた、とっても疲れていた
様子。仕事だけでは説明できない疲れ。

黒バラを一枝私にくれようとしたあの目付きには意地悪そうな光
が走った。敵対の心かもしれない。それだけに熱い心を持つとの証
拠。

きっと仕事では事務的な言い回し。でも個人の生活ではあの眼差
しが光り、熱い気持がほとばしる。

松木さんはどちらのアキコさんを見ている、翔は彼女に何を見た
の」

サキの推理が翔で停止した。それ以上に推論をすすめるとアキコ
が主演の舞台から、サキははじめて、出番の無い三者と分かってし
まうから。

松木が魅入れられあの花束に託したのは私のアキコの演技と決まる。
仕事シーンなどとつくに越えて、二人心の世界で交流している。で
は翔は。

「翔だって同じ」と思いが至った処でサキがまた引けた。

「未だ翔は知らないけれど、松木さんは翔の実の父。父と子の二人
がある女性を巡り取りあって、いざれ真実は知れ渡る、その時傷つ
くのは三人すべて。その真実を今知るのには私だけ。」

二人の隠れた間柄を黙るのか、誰かに明かすのか。それが誰かが
分らない。黙るままにするなら、それは今か、未来いつかまで、
未来も永劫なのか、私は分らない。

皆に言う、誰にも言わない、今は言わない、ならいつまで」

念仏のようにサキは繰り返した。
パイパスに入った。そこから先は信号もなく渋滞無しの流れに乗
帰る。念仏を数度か唱えれば、北山台の自宅に戻ってしまう。家に

それなら今日、それも今しかない。

幹線とバイパスの交差点が黄に変わる直前、サキは強引に右車線に割り込み黄が赤信号に色変わりする寸前に、力まかせのユーターンを決行した。続く数台から危険運転への怒りでクラクションが幾度も響いた。

「皆に言うは不道徳、誰にも言わないは過ち。ある人にだけ伝える。一番重要な一人それは松木さん。未来からの舞い戻りと怖れた私の直感、マツヨの謎解きヨッチャンの言い伝え、証拠は二つ三つも上げられる。

静かにしつかりと説明すれば納得してもらえる。松木さんから翔へ連絡を入れてもらう。お前の父のマツヨは私だと。アキコを諦めよと忠告してもらえらる。」

松木の住所は写しに控えてある。北山台とは逆方向の松木自宅にハンドルを向けた。

松木が全く偶然に北山台花店に立ち寄った経緯、丘陵地の新宅を述べる。

アキコをマンション前で見送ったあと、ある所用のため北山台に向かった。駅近くにさしかかり道筋にこぎれいな花店を見た時、花束をアキコに贈ろうと衝動的に思いついた。事務所での無礼行為の償いとして、そしてアキコへの思いの徴として。松木は心に語った。

「今夜中ならば喜んで受け取るし、バラならば必ず気に入る。バラだけをまどめて、それを抱えると香りに胸がふさがり、視界をも塞ぐとても大きなブーケにする。その効果は明日では遅い。」

店員の少女がまどめたバラの花束は、みよがしの様がなく暗さを漂わせたが、それも一つの風情、アキコらしいと思いついた。徒なアキコの姿態と表情を彷彿とさせる妖しさが匂っていた。受け入れにくれの期待を込めて「夜啼きホトトギス」を添え状にしたためた。

その後、駅の東方の丘陵地に入った。なだらかな丘、その下の麓から背の尾根まで、緑に囲まれた居宅が散在している小さな団地。

松木はこの団地の一角の広い庭と居宅を叔母から相続した。

松木の伯母白川真智子は市立病院に長らく勤務した看護師だった。退職と同時に官舎アパートから引き払わなければならぬ。松木の母、妹の佐知子を共に物件を下見に向かった。真智子は見晴らし遠くの景観に心を奪われた。

「オオタケ、ミトウサン、そしてゴゼンの頭、奥にはダイボサツの

山々を指さしながら呟いた。谷が影を刻み、森が浮きあがる。山

稜を息止めて見続けた。

伯母とは行き来はないので松木は真智子の近況は気にとめなかった。引越してから十年、週末の夕方、緊急の電話が入った。姉の異変を告げる母、佐知子からだ。

「マチちゃんがおかしい。一緒に来て」

真智子は施設に入所になった。徘徊を繰り返し、引き込まれ事故で死んだ。遺されたのは土地と居宅、相続する近親者は佐知子のみだった。相続しても「再相続になるから」息子の松木に相続を押しつけた。

その頃、松木は妻元子との相克がもはや回復不能の迷路にはまりこんでいた。マンションを売却して元子との生活をすっかり忘れる、松木が相続肩代わりした理由である。

都心に近い有利さでマンションの買い手は現れた。新居となる家の改修整備を急がせた。売却から相続と転居。新しい住所を元子には一切知らせなかった。翌週の月曜がマンションの明け渡し、金曜の今日がこの部屋の最後の夜だ。

明日以降、元子が松木に連絡しようが、姿を消した夫松木は見えない。彼女が目線を四方に回しても、どこにも夫義一の影は見えない。

松木が気に入ったのは居間で、無垢板の張りつめ床には特注のテーブルがおかれていた。掃き出し窓が西に開いてベランダを越して、西の遠方、多摩の山々が頂を連ねる。

改修工事の仕上がりを確認し、満足した。マンションから移す家具什器はすでに引っ越しトラックに積み込んであり、引っ越しを待ただけ。その後マンションに戻った。家具の抜けた空虚な自室に入っただけ。その後マンションに戻った。家具の抜けた空虚な自室に入っただけ。

疲れは残るが満足した一日だった。床に胡座で落ち着いてしばし休むと、インターフォンが来客を伝えた。受話器を取ると、先ほどの花店の少女だった。無事なる配達と受け取りを伝えた。礼を述べ受器を置こうとする松木を、少女の声が止めた。「大事な話をしたい」と。彼女の声が弾んでいるのは、嬉しい伝言を預かっていると誤解して、共同入り口を開錠し玄関を開けて店員を待った。

花店少女が弾む息もそのままに、突然切り出したその大事な内容は、アキコからの伝言ではなかった。思いもよらない因縁、期待もしない、二十余年誰にも一切語らなかつた生き恥をこの少女が曝したのだ。花束を頼んだだけ行きがかりの花店の、店員の少女がなぜ過去の恥をつつくのか。

松木は戸惑い、冷や汗が幾筋も落ちた。過去を少女がすっかりめぐり出した。

「厚かましさを畏れます、お許しください。松木様、木暮奈津子を
 ご存じですね。二十三年前になりました、あなたと奈津子の出会いは
 葛飾立石です」
 思いもせぬ問いつめに松木は答えを返せず、二人は見合った。正
 しい答えだけをのぞみ、「さあ早く」と松木から視線をそらさないサ
 キ、うろたえる松木。サキを見るその目は震えた。
 「奈津子を知った」と一言だけ返せばそれは正義。生きる四人に
 あまねく正しさが行き渡る。二十三年の隠蔽が裁かれて、沈黙のく
 びきが解き放される。松木はなんと演技を続けた。
 小金を貯めた夕年男、小さくても会社の経営者、そして女を愛し
 たい四十五歳の喜劇を守った。正直さなどは思いつかず、口から出
 任せの偽りで暴かれた過去を直視せず、逃げた。
 「その女性を知らない」
 「私は確信しているのです、松木様は二十三年前、立石で一人の美
 容師、木暮奈津子を知ったと」
 「急にそんな話持ち出して、驚くではないか。それは間違いだ。思
 い違いで人違い、判断間違いだ。立石なんて住んだ昔もない」
 正と嘘が混じった。嘘とは「奈津子を知らない」で、正しかった
 のは立石には住まなかった。
 四ツ木に住んでいた。立石と四ツ木は隣りあう街で、ほとんど立
 石に住んでいたとも言えよう。嘘に近い言い逃れだった。
 サキはあの怖れに由来する直感には自信を持つ。さらに人生の流
 れで、これほど重要な生と死の関わりについて人が嘘を貫くなど思
 いもよらない。
 しかし即座に断固に否定された、この反応は想像すらしていなか
 った。返答には躊躇も、うろたえる陰り、嘘で答えるとまどいが見
 えなかった。
 拒絶に気落ちしたサキは目を落した。慰めようと松木は、
 「人違いだからって悲しまないでくれ。それよりも花束はどうだっ
 た、喜んでもらえたかな」
 話題を変えた、過去から逃げだした。
 「ええ、アキコ様はとっても、
 松木様、人違いを謝ります。木暮奈津子はお忘れください」
 他人の玄関前で知る、知らないと水掛論にのめり込んで解決し
 ない。詫びが出たがそれはサキの本心ではない。彼の本音を伺うべ
 くもないのであきらめた。身体を回しくると廊下を走った。
 「店員さん急がないで。さっきの話、奈津子さんという方とあなた
 の関係は」
 引き止めてもサキの急ぎ足は止められない。「女性とは昵懇だった」
 と走る背に叫べば、足は止まっただろう。その一言を出さかった」

廊下を走り去り、サキは松木との会話を反すうしていた。「人違いかもしれないし、本人かもしれない。あれだけ強い口調で否定したからには、本人だったとしても、あの過去は蒸し返したくない。思いから外したい逃避が心にあつたからだ」ともう会話は無用とサキは非常階段を駆け下りた。「少し話しを」が廊下を追いかけたが、サキの返事はなかった。

部屋に戻り会話を思い返し松木は情けなくなった、悔しいな、すべてを聞けなかった。

彼女は知っていて、きっぱり否定したから逃げた。あんな風に迷惑顔こしらえて、きっぱり否定したから逃げた。なぜあの少女が奈津子を知っているのだ。あの子が奈津子の子、私の子なのか。それは違う、彼女は奈津子にも私にも、どちらにも少しも似ていない。

奈津子は産みかかったろう。そのため実家に戻った。戻った先は北関東の農村、風習人心の遅れた田舎だと聞いた。父親なしの子を産ませる寛容のかけらもない。おろしたのさ。

生んだら認知を求めると連絡があつたはず。

結婚してどこかの空の下、風に吹かれて、たのしく過ごしているだろうよ。少女は奈津子の幸せを告げに来たのだ。そんなハッピーエンドを聞かされても嬉しくない。焼けぼっくいには拾わない。

松木からサキはあつという間に遠ざかり、二度とサキに会う機会はない。生まれなかつた。生まれつきの誰かを知る機会を松木は永遠に失った。

逃げたのは松木の節目だった。過去からつながる人生が逃げた。それに気づかず、これからも知らずに淡々と引っ越し整理に戻った。

関西に出張中の樋田、市内ホテルに落ち着いている。

予定時間にホテルに到着した。部屋に落ち着き、しばらくは会議プレゼンテーションの直前に取り組んでいた。着信を知らせる振動が二度続いた。携帯を開けると二通のメールを受け取っていた。

「翔クン、

無事に大阪に着きましたか。ホテルの居心地はいかがですか。市央から離れているので周囲は静かでしょう。資料のチェックに余念

ないかと思いません、いつもの仕事ぶりかどうですか。戻る時間は遅い午後、あなたが半日で仕事終えて明日に帰ったら、帰ってくる。あなたはやめなさい。それは危険です。お願い、明日に戻るのだけはやめて。たっ

のお願いです。

実はちよつとした偶然でサキさんと出会った。すばらしい女性、女の私だって愛してしまふ。でもあなたを想っているのは彼女だけじゃない。あなたを想うアキコを氣遣つて。

私の唇は熱かったでしょう。舌はねつとりと絡まったでしょう。それはあなたを想う心が熱いから。

その後の五日間、あなたとは机を隣にしていたが、一度も明日の土曜日を語らなかつた。今夜になつて語るならばそれは一つの願い、土曜日はなくて日曜にお帰りくださいとだけ。

心配する一人の女より。

追 会議のあと駅に向かったら電車が停まっていた。松木さんにマンションまで送っていただいた。その後でいろいろあつて、とある事情が明日まで尾をひいている。あなたには隠し事なし、全てを話すわ。明後日、日曜の再会の場で」

もう一通はサキからだ。「翔、多摩に離れ大阪を泊まる。異郷にすさぶ風は冷たかろう、明日の夕方にお前は多摩に戻る、もう半日と堪えて忍べば辛さも消える。

今週はメールの一通も届かなかつたけれど、それは翔が私を忘れていない証。私から先にメールが出ていくけれど、明日にはお前がかならず返すはず。明日が約束の日なのよ。何時にお戻りになるの。

サキは心配している、何かが翔を襲うのではないかと。想像できない何かが襲えば、あなたは私から離れる。心の地平の果てに翔が消える。ごめん、つまらない事であなただを惑わせて、私の心配を杞憂だと叱つて。あなたのサキより。

追 アキコさんに出会つた、他にもたいへん重要な人、あなたが探している人と偶然に出会つた、でもまだ確認できていない。あなたと向かつてでないと話せない」

二人からメールを受け取つたのは日付の変わる前後であつた。一方は予定を延ばせと迫り、片方は予定通りにと責める。どちらかを取れば片方の願いには叶わない。

パソコンスクリーンを閉じて部屋の灯りを消した。

翔に氣になるのはアキコの追伸「松木といういろいろあつた」その内容である。あえて追に記すのは、それに注目して欲しいとの強調で、そして「会つた時に話したい」では思わせぶりではない。

初対面で翔は松木にはある関心があつたが、その可能性を打ち消した今は反発しか感じない。

仕事や趣味などどうでもよい話などでアキコが追伸に特記する訳がない。いろいろあつた事情とは「女と男」しかない。

アキコがあおいけ好かない中年ピエロと、男と女で進展しているのだ。サキとアキコ、二人がたがいに会ったと報告している。翔抜き接点があった。そしてサキの「重要な人を捜し出した」との報告である。翔も「探している重要な誰か」とは実の父しか無い。サキが見つけたのか。メール二通は簡潔で、気がかりばかりだ。多摩を離れて半日しか過ぎていない。翔に関わる事柄が本人を外して多摩で動いている。楽しい話ならばその発端でも書きおとす、望ましい進展ではないとは文面で分かる。何が起きているか見当はつかないし、あたら想像だけで焦りを覚えたくはない。

「日曜までとアキコが言う」

大阪に残って日曜の夕べに多摩に帰る。そしてアキコに逢って「なにがあったのか」をゆっくり聞く、その選択しか取りようがない。しかしサキの伝える「重要な人」にも気が残る。

「アキコにもサキにも会いたい」

より強くどちらに会いたいか、単純な決断すら樋田翔は決められない。一人を選べば一人が逃げる。二人を選べば二人をきつと失う。浅い寝付きに思いの筋はほつれ乱れてまとまらず、うなされながらの半夜はかく過ぎた。

翌朝のチェックアウトに、翔は「連泊は可能か」を尋ねた。予約画面を調べるまでもなく受付係は「全室予約されている」とつれない返事だ。春も盛り週の週末、団体予約が幾つも入っているのだ。関西事務所に早めに入って、幾つかのホテルに電話を入れたが、いずれも状況を確認もせず「満室」と断りが返るだけだった。

当日の予約を断るホテルは多いが、これほどあっさり断られたのは翔が携帯から予約に執着したからである。会社の固定電話を使い、社名を名乗れば朝の内であればシングル部屋なら確保できた。彼には、会社電話も社名も使う気持ちのゆとりがなかった。

部屋を確保できないまま会議が始まり、翔はプレゼンテーションを持ち時間でそつなくこなし、アキコの替わり役の評価を高めた。昼食を共にして事務所を出たのが午後の二時半。地下鉄に乗りこむかわりに駅前広場でベンチに座った。

日差しの強い午後、土曜とあれば広場を歩き交う人は多い。日の差し込みに暑い歩道を、皆が歩き走り、声を掛け合い駅に吸い込まれる。話題はこれからの予定、動物園テーマパーク水族館、キタカミナミに出て買い物、京都まで遠出、奈良まで行けば特別開帳に潜り込めるなど。陽気の良さも日の明るさも彼らの仲間、声高に午後と夕方を自慢している。

広場の喧噪に巻き込まれながら翔は、己の一人だけが午後の予定を立てていないと思いついた。夕方、夜になったらどこに座るのかわらうつくかも知れない。

「予定通りに新幹線を取れば時刻にはアパートに戻る。夜を誰かと過ごす余裕はできる。しかし部屋から一歩もでないで、アキコにもサキにも会わなければ、それは男の選択になるのか。」

ふらりと出かけてどちらかに、気持ちとしてはきつとアキコに会うだろう。アキコには全てを語ってほしい。いやサキかも知れない。今週末が最後、これを逃せば重要な人物の件を聞けなくなる。そして土曜の逢瀬は決まっていたのだから。

選ぶに時間はかからない。百円玉の裏か表かで決めれば簡単だ。でも大事な夜を百円玉が決めるに樋田は踏み込めない。

午後、昼食会のはねた時間、関西マネージャーの携帯に着信が入った。どこかの装置が故障したのかと身構えてボタンを押した。週末の電話は機械の故障に決まっているからだ。

聞き慣れない女声、東京弁である。がなりまくる女性を多数知るのだが、標準弁を静かに話す女性はその顧客リストに載っていないので安心した。美声の持ち主は本社の島田アキコと分かった。

「アキコさんが来てくれるとみんなが喜んでいただけ、代替した翔くん、まともな発表しましたよ。アキコさんにはまたの機会を提供するから。」

際限なく続くマネージャーの話しぶりを止めて、

「樋田くんが無事に代替役をこなせて良かったわ。彼から一報をよこすはずだけれど携帯の電源を切っているのよ。今、近くにいますか。」

「携帯不許可の会議だったので切っていたのですよ。会議の後で皆と会食してあった今別れた。携帯の再スイッチを忘れているのだから。」

「午後の予定について話しましたか。」

「ああ話した。せっかくの週末だから一泊延ばしてハネ伸ばせと言ったら、そのつもりはあったけれどホテルが取れない。市内をウロツいて遅く帰るのだと。」

「帰るって言ったのね。」

「当日の予約で部屋を取るのには今の時期は難しい。朝のうち言ってくれたら社名でシングルならとれたけれど、午後になるとその枠も無くなるから。」

市内に知り合いでもないのか、屋食が終わったらそそくさと出よう。落ち着かない。誰かが待つかと尋ねたら、いいえって否定したが、顔が赤くなっていた。あのあたりは若いな。あの若さでの押しだからな、放って置かれないだろうな。」

「マネージャーさん、貴重な報告ありがとうございます」
樋田の赤くなつた横顔と電話のアキコのあわただしさ、この二つに連関があるとは思いつかなかつた。樋田はベンチに座り携帯を再起動した。メールと留守録の知らせが点滅した。

「翔様、
先ほど音声を入れましたが通じませんでした。留守メールを送ります。」

昨夜のメールではもう一泊をなどと願いましたが、命令口調の不躰をお許しください。
先ほど関西マネージャーからホテルが取れないと聞きました。あとでなく道しらぬ市内をさまよふのまでの覚悟と聞きました。切なくなつて、逆を切望しています。時間をあたたら大阪などでつぶさずにお帰りください。新幹線の時間をお知らせください。品川にも東京にも、新横浜にだつて出迎えます。

知らせたい話があります。
いつだつて聞けると断らないで。仕事に出す内容ではないし、電話では話したくない。面と向かつて、顔と目を、話しの口と聞く耳をもつと近寄らせて話したい。

橋の上の夕べから一週間がたつた。別れているのは半日ですぐに一日になるけれど、思う時間だけが積み上がり、半日は十日に、一日は百日にと心が焦る。

今夕今夜に会えなければ、永遠に会わないと悲しくなる。今すぐに帰つてきて。あなたのアキコ」

樋田はすぐに返信をしたためた。
「敬愛するアキコ様
メール拝読しアキコ様のご配慮には感動しました。心の震えを禁じる事が出来なかつた。」

アキコ様のお言葉は命令口調ではありません、いつも、そして前のメールでも優しさこもる、気遣う姉の身ならのお心添えと感謝します。一泊延長はできませんでした。そしてアキコ様が今夕に待つと知り、行動を取ります。今夜には多摩に帰ります。お迎えには光栄、身に余りません。しかし予約の席を失したので再予約となります。これから新大阪に向かい手続きします。あなたの膝の下 翔」

返事を受け取り読み終えたアキコは、へりくだりの奥に翔の熱気を感じて、恍惚に宙に舞うほど跳び上がった。離れていてもメール画面からは思いやりがほとばしる。熱の放射をメッセージと共に受け取つた。

翔の携帯に音声の電話が入った。アキコからと信じ取った。電話の声は「翔、仕事は終わったのね」と静かに響いた。サキだった。翔は静まった。

「ここでの仕事は終わった。帰って会社の人と会わなければならぬ」

「私とは何時会うつもり」

「分からない。もしかしたら会社の人とは行き違いになるかもしれないし、サキと会うとして、夕方遅くかも知れない、あるいは夜になっても時間がとれないかも知れない」

「夜になっても無理ですって、前から約束だったでしょう、あなたの今夜は私の時間なのよ」

サキのこれほど強い口走りを翔は初めて聞いた。

サキはすぐに理解した。「翔が言う会社の人とは打ち合わせなど仕事のために会うのではなく、アキコさんに会うに間違いない」との心配を募らせた末の強い口調だった。

優しい口調に戻ろうと、翔に語りかけた。

「翔、あなたは迷っている。なにに迷っているのかを私は知っていない。しかし私は翔にある事情を説明したい。その事情とは昨日の夕方と夜に発生した。あなたの今の迷いとも関連があるの。」

でも電話口では語れない、二人で過ごす夜があれば語れるけれど、今夜を共に語り合いができないなら、翔は迷路から抜け出られない」

アキコは時間を置いて樋田に連絡を入れたが「電波の届かない場所か：」の案内が戻った。関西事務所から新大阪までは地下鉄を経由する、樋田はもう地下鉄に入っているとアキコは判断した。「三ー四時間もすれば帰る」そしてその時間帯は「明日の同じ時間この場所」に迎えに戻る松木との約束時間と重なるのが気がかりだった。

同時に二人との待ち合わせが進行している、いずれを遅らせるのか取り消すか。アキコはいずれも取り消すつもりは無い。

いずれかを優先しどちらかを退ける、その決断をアキコはとれない。

一方、それは翔がサキかアキコかを選べないのと同じ、心のさまよいだ。しかし二人にはほんのわずかな重みの偏りが残った。選択するとの能動性まで至らないのだが、心をありよう決める中心点が偏心していると言える。受動的でもさまよう中で岐路があれば、それはこちらと心が偏心の側に振れる。

アキコは翔に、翔はアキコに偏心点を傾けていた。

すばらしい五月晴れの午後になった。自室に飽きたアキコはバイクウェアに着替えて川の遊歩道に出た。練習はいつもの道程、ペダ

ルを踏み続けたのは二時間と五十キロ。ライドを終えて流れる汗をふき取らず、一時を自室で涼み、火照りが消えた。シャワー浴びず白粉一はたきの薄化粧も頬にのせない。日焼けした顔、肌も身体もバイクで走ったそのまま、外出の装いに着替えた時が丁度約束の時間だった。

鏡を覗くと、鏡のアキコがこちらを向いて囁いた。

「香水をわずかに吹けば匂いが消える。脇の甘い臭さが和らいで、それで何かが起こっても、何も起こらなくても結末は、香水が決めるのか脇の甘さが決めるかはわからない。ここから先は全て成り行き、時の流れが全て決める。あなたが決めるのではない」

鏡のアキコも偏心の振れにまかせよと忠告したのだ。

携帯を開けたが、樋田からの入電記録は残されてなかった。もし彼が新幹線に乗りこんでいるならば、メールを車内から発信できるはず。アキコは不満を感じた。

真下の街路からクラクションが軽く跳ねた。

聞き覚えある重いその響きは、到着を告げる松木の合図である。アキコはすぐに外に出たのだが、一歩だけ玄関で留まった。飾り棚にはバラの花束が生けてある。開きかけた深紅と黒バラを一輪ずつ選び、胸に留めた。

マンション前の路側、ボンネットに半腰をおろし腕組む松木が見えた。駆け寄るアキコに笑いの一崩しも見せず、真面目さを装い「ヒメ」と手を取りドアを開けた。松木は運転席に回る。

いつもは沈黙の車内にざわめきが立ち上がったと松木は気になった。アキコは口を結んでいるし他に誰も乗せていない、ざわめきが耳に止まるが声は聞こえていない。

その原因は音や声でなく気分だった。車内に跳ね返りあふれる光、光の放散を音として聞いた錯覚が、ざわめきを耳に運んだ原因だった。

日焼けし上気した赤い額のアキコが胸に黒バラをかざしている。ざわめきが車内の通奏低音なら、アキコが照り返す光りはバイオリンが奏でる旋律か。

太陽は輝くし空はどこまでも抜けて明るい。車外を流れる街の空気は澄み渡り、ここは日本でも東京でもない、まして多摩でない遠くの国を運転している気分にとらわれた。松木は密かに「アキコとフランスの田舎道をドライブする」錯覚が現実になれと祈った。

「時間通りね、計画も予定通りなの」

「これから食事に案内しますよ」

「なぜ私をヒメと呼んだの」

「昨日まではお嬢様、そして今日はおヒメ様だから」

「明日からは私は何になるの」

返答の難しい質問をあえてアキコはぶつけた。アキコの挑む口ぶりに、気分の高ぶりが聞こえる

松木は車の行方を知っているし、今日の行く先、終点には思惑がある。

おヒメ様を双六揚がりの進化形に向かわせようと苦しみ、仕掛けを巡らすのは男なのだから。しかしまだ来てもない結末をひけらかすのはぶしつけと松木は語らない。

手元ボタンを操作して、ウインドウを右も左も全開にした。

「風が抜けてゆく、気持ちいい」

アキコの髪が風にほつれた。

その風の行方に深く息を吸う松木は、日なたの乾いた匂いにアキコの体臭が混じるのを嗅ぎ分けた。汗にまみれて乾いても残る生身の女の匂い。あえいだ肉が肌に滲ませた脂かすが、肌の表にこびりついたスポーツの名残の匂いで、それがむらと女臭さをせり上げて、ほつれる髪に風の流れが混じりこみ、髪の毛の漂いが運転席に立ちこめて、差し込む光に混じり松木は目が眩むほどだった。

「花束ありがとう」

松木はアキコの胸に目を落とした。深紅と黒の二輪が揺れていた。バラをかざしたのはアキコの謝意で、喜びをバラが運んできた。松木は理解した。喜びとは、タベには持ち上がる事態のアキコの構えであり、受け入れるか、受け入れないかのどちらかと推理した。

胸につけているのは黒だけでない、深紅とあわせての二輪である。とっさに二輪を選んだのは、二輪ならでは、アキコだけが企む目的が隠されていた。心が偏心していると、あたかも知っているかの選択だった。二輪を持ち出して、成り行きだけで舞台が進まなかった。

タベから夜が進み、日付が変わって夜明けの間際、「夜遊びホトトギス」が裏山に戻る暁待ちの時合い、谷戸の藪に託したアキコの二の情けを二色バラで松木は思い知ることになる。

選んだ装いはざっくりと織られたリネンワンピース。薄い灰色の基調の上に、熱帯を思わせる褐色の花に緑の葛と蛇がからまる大胆な柄が胸から腹部に描かれていた。タベの日差しが脇窓から差し込み、葛がきらめき、緑色の反射が車内に浮かんだ。

「午後はバイクで遊歩道に出ていた、土曜日の午後は軽く練習する、いつもの通り」

「良い天気にも恵まれたから、さぞかし気持ちよかったですよ」

「とつても汗をかいた、体中が溶けるほど」
膝の上に置いたポツシエットがブルブルと震え、携帯の着信

を告げた。松木にもその震えは聞き取れた。発信者は二人の会話を妬むのか、ブルルとしばらく続いた。樋田からの音声連絡であるとからだ。自室で身体を冷やしていた先ほどまでは、樋田からの電話をあれほど待ち望んだのに、今は松木と二人の車内、アキコは着信を取りあげなかった。そこが成り行き、道の分かれる交差だった。取り上げなかった電話ながら、着信振動がかかる男の叫びとアキコは愛おしみ、分かれ道に進んでも後ろ髪を引かれる思いを振り切れなかった。車は街道を下りつつ山間に入った。峠を越せば隣県との境となる手前で左の小道にそれた。すれ違うのも難しい林の小道、片側は尾根にせり上がる急な斜面、一方は谷底。その谷が奥に奥にと手招きすれば、藪をかき分け車が進む。最奥に至って道は行き止まり。白壁の平屋作りの建物と駐車スペースが見えた。入り口の戸の脇にはメニューの白板が三脚に掛けられている。車の進入を待っていた店員が無愛想に戸を開け、顔を出した。個室に案内した。

外を見ると窓のすぐ脇から緑が始まる。コナラ、サクラ、ツバキが濃密に混生している。新緑が枝を広げ春の若芽を吹きあげていた。太陽は沈みかけている。夕日は森を脇から照らし、森の奥にも光りが差し込み木陰を伸ばしている。

枝葉の反射が食堂の個室に忍び込み、窓際に座るアキコの膝に届いた。

それが膝を暖めるままに任せるアキコ、風が吹きこみてらいもみせず風は、膝と腿を暖かくさすった。彼女は森を見ていた。そして森の先の夕空を仰いでいた。見上げれば多摩の山々は高くそびえる。茜の空に静かに座る頂きに、黙ってアキコは見入るだけだった。松木に眩きかけた。

「見透かして目が届くどこまでも緑。森が緑に開き、空は茜、雲が赤く流れる」

「草木が受けて、草むらと灌木、藪に木々が重なる森。斜面をかけ上ると尾根筋に至る。登り切った稜線。谷の向こう側にも緑が繁茂している。森の緑が途切れたら、人が住む村。

逆に向いて、あの稜線を裏から眺め、逆に照らされる光で山の頂を

見つめている」

溜息をためてアキコが答える。

「尾根の向こうは辺境。眺めが裏に転写され、思いはさかさに記憶する。こちらも辺境、思いは通わず心の裏にもとどまらない」

西の日は、アキコの膝から床に流れて影に消えた。太陽が人々を見放す時間となる、太陽は夜のアキコを守らない。松木が窓を開けた。

「ここは無人の森、想いが心にとどまらない斜面に鳥が喜ぶ」

ヒヨドリ、コジュケイ、ヤマバト、シジュウカラ、メジロ、コゲ

ラ、ジュウビタキ。開け放した森は鳥のさえずりの洪水だった。

ときわ誇らしく、夜が迫ったと知らせた一啼きであった。ひ

五 プロバンスの山と川

廊下から靴音が聞こえ、ノックと同時に無愛想に店員が入ってきた。料理として供されるのはその日のメニューのみなので焼き加減を聞きに来た。

松木は加減を指定して飲み物には細かい注文を出し、向かう席に着いた。皿を置きグラスを立て、テーブルを挟むだけ二人の空間が遠くなった。

「ヨシカズさん、あなた森が好きなの」

「森と私の山が好きだ」

「あなたはその山はどこにある」

松木はその質問には答えなかった。話題を変えた。それはある夜の体験で、山々との不思議な対話だった。

「山が語りかけてきた。こう言った、いつも一人じゃないか、伴侶はいないのかって」

新居となる改修した丘陵の家での一夜の体験だった。その家に一人で住む経緯を話して話した。アキコが初めて聞く松木夫婦の諍いだ。最後の締めくくりは、

「諦めの十年間だったが、もたれ合いの関係は崩壊した。罵りあった偽り舞台は多摩地から遠く東にさがる。山からの視界を遮る湿ったモヤが常に立ちこめる低地に湿地。山からの視界を遮る湿つ

た憎しみあう夫婦喜劇を多摩の山に見せられなかった」

「山はどう反応したの」

「尾根が震えるほど号泣した。そして約束してくれた。女をお前に与える。それは鳥だ、森にさえずる鳥がお前の新しい妻だと約束した」

「フツツ」とはアキコが忍びながらも漏らしたのは、白い歯の笑いだ。変わった口説き方と疑ったのだ。すぐに真顔に戻り、納得したと装いながらアキコは、

「山が松木さんに贈る生け贄は夜遊びホトトギスでそれは実はアキコ。だって奔放でお節介でけたたましくて、すぐに飛び立ち逃げるから」

「鳥は山鳥、きらめく羽根が背に生える、女は山鳥、滅多に見られない」

松木は目の前の生け贄に手を延ばしたが、アキコは遠いテーブルの端。どんなにあえて手を伸ばしても彼女の頬に届かなかった。食事が終わった。「新しい家から山を見せたい」と松木はアキコを誘った。アキコは

「あなたの山を見せて」と返事した。

今夜に限って何も起こらずにマンションの自室に帰るなどあり得ない。一人だけの不毛の週末を過ごしたくない、肩と腕、胸と腹、肌にも熱をアキコ一人の夜は冷やせない。

松木がアキコを求める動機と似通うが、松木はより継続する関係を持ちたいし、アキコは満たされる一夜の逢瀬を願う差はあった。

松木が車を取りに出て、アキコは庭のなか、夕闇に一人残された。ここがもう一つの岐路だった。

車寄せから合図のフォンが聞こえた丁度その瞬間に、携帯が音声通話の着信を告げた。アキコはその通話をすぐには取らず、振動が二度三度と続くままに任せた。樋田と分かる。

「この着信を取ったら樋田と今晚会うことになる、会えば起こる何事かは、それが何かは松木とも同じ。でも今夜に会えるなら知り合える。そのために逢うのだから」

バッグから携帯を取り出した。

「翔クンね、やっと連絡できた」

「アキコさん。ホテルが取れなくて、新幹線も満員で、飛行機にしました。待ち番号を持って待機しています。きつと今夜遅くには帰る。私を待つ誰かが待っていてくれる。その人の面影を払いきれないから」

「あなたを待つ人は誰なの、その名を教えて」

「それはアキコ」

「午後早くに連絡とりたかったのよ。けれどあなたはいつも通話外だった。私はある人と一緒、彼に今夜をさらわれる」

「アキコ、その者に夜をさらわれないで。今夜にあなたと会う、そのために帰るのだから、何時になっても会いたい。明日に戻るのだから取り返しがつかない。今カウウンターに飛び込まないと、待ち番号

が無効になる、東京で今晚に……」
狂いおしさ、逢いたいという希求、それをや々と翔とアキコが共に抱けたのだ、今晚に逢うと、そして通信が途切れた。アキコは携帯を強く握りしめた。
「気持ちが一緒になった」
成り行きで決める行動はこれで終わり。今日の運命は自分で決めると決意した。車を戻して寄せる松木の目を盗み、携帯表面で時刻を確かめた。
「あと2時間」

二人が食事している頃、樋田は伊丹空港で空席待ちに並んでいた。アキコとの最終連絡がつかない。切符が手にはいるかはまだ確実ではない。
遅い午後便では指定が取れず、待合いの雑踏と喧噪にはいたたまれなく、樋田は空港に移動した。羽田行きは四便が残るがいづれも満席なので、キャンセル待ちの番号を取った。空席に希望を灯す旅客者は多い。そして搭乗券を手に行ける者は一便にわずか一、二名にすぎない。
最後の便の離陸が迫った。

電光掲示がキャンセル数は二席と流し、番号十二番、十三番を所有する者が搭乗できるとアナウンスがあった。十二番を所有する客はさっさと手続きを始め、ゲートに入った。

「十三番を持つ方の手続きが遅れている。次の番号を持つ方に優先権が移ります」

カウンタ―前ソファに残ったのは二人で、一人は周囲をせわしなく見回す老人。「東京の孫がダンブにひかれた、今が死に際だ」と漏らして泣いた。もう一人は若い勤め人風の者。考え込んでいるのか、床を見下ろし座り込んでいる。仕草からしてキャンセル待ちには見えない。

老人の持ち札は十四番、十三番が執行しなければ搭乗できる。孫の死に目に間に合うか、不安な老人はせわしなげに周囲を見回す、ソファで携帯とにらめっここの若者は優先者であるわけがないと無視した。

その者があわてて買い物ブースから戻ってくれば満席。
幾度かのアナウンスに今のところだれも姿を見せない。走り込む客がいるかと係員が周囲を見回したが、気配ない。苛つきを隠さず、彼はマイクを取って最後のアナウンスに入った。

「出発時間が迫っています、残り一分で次の方に優先が移ります」
搭乗できると決まったのも同然の老人は、にやついた顔に戻った。
搭乗券を要求した。係員は手を挙げ老人を軽く制止した。公平を貫

くために壁掛け時計を指さした。秒針があと一回りすれば老人に席をあたえらる。ソファの男は携帯の操作に迷っていた。緊急メールが二通入っていた。搭乗の前には読めるのは一通、どちらがより重要なのか、送り主を見るだけでは分からない。二人の送り主はいずれもかけがえない女性で、二人が彼を追い求めて、彼も二人を求めているからだ。目をつぶって「ええい」一声叫んで片方を選んだ。画面にはメールの前の一行だけがでた。それは「翔、帰ってきて、今すぐに」ソファの男は樋田翔、メールはアキコからだ。全文を読みたいが時間は足りない、スクロールする指先に力を入れた。どんどん行が流れるが、メールは長かった。すでに十数秒が経過している。カウンターの前では老人と係員が話し始めた。「お孫さんが重態ですって、今晩中には会えますよ。規則ですから秒針がすすむのを待ってください、でももう少しですから」「心配してくれてありがとうございます、本当はかすり傷、それも三年前の事故だよ。この待ち客は家にかえっているよ、券を渡しなさいよ」スクロールが終わって、最終の行が出た。「ある人と一緒、彼から救って」と樋田は読めた。彼は立ち上がった。「私を待ってくださいののだ」ここまで一分が経過した。アキコに音声電話を入れた。その電話がレストランの玄関脇で車待ちしていたアキコにつながった。一言を発すれば一秒が経過する、返事待ちまた返せば十秒が消える。通話を終えるや樋田はソファを跳び越え、発券カウンターに身体ごと向かった。樋田が宙に跳ねて、カウンターに飛び込んでも非情な一秒は刻まれた。老人は番号札を誇らしげに見せている。「孫が跳んではねて大喜びするぞ」係員が番号札をと搭乗券を交換するまで一秒が残った。裏向きの札を表に返し待ち番号が確認できるようと老人に促した。長針は残る一秒を刻もうと、わずかに五十九秒位置でとどまって針先を震わせた。まさに六十秒が刻まれる瞬間、老人が示した待ち札のすぐ脇に、一番だけ若い優先札十三番が差し込まれた。「私が先だ」と分け入ったのが樋田、受け取る寸前の老人を押し分けて、樋田は最後の搭乗券を掠めるように取った。そして長針の震えはおさまりカッチと一秒を刻んで六十秒の経過となった。最後の一秒は老人から逃げて樋田に微笑んだ。「死に目に会えない」老人は泣き声に戻った。「三年前のかすり傷なのでしょう」と係員は耳を傾けず、樋田には「今すぐ搭乗してください、一秒でも遅れたら飛行機はあなたを見切りで離陸します。携帯電話をこの場で切ってゲートに飛び込んで」樋田の背を押しながら告げた。

背を押されゲートに入った樋田に、さらなる気がかりのもう一つのメールはサキからで、それは開く余裕もなかった。

多摩に戻る。

家に帰るのにアキコ乗っているのが松木は上機嫌ぶりを隠さない。「登記変更はまだしていない。改築が完全に終わっていないからで、壁の塗り替えを待って。アキコと共同名義にしたい」とまで進めたが、アキコは上の空、生返事で聞き流した。松木宅に着いた。

帰京を試みる樋田が気がかりとなっていた。最後の電話は尻切れになっってしまった。絶対に樋田と会う。車に乗って、松木を横にしてもアキコは決心した。

山道を抜けるハンドル捌きに注意を払う松木、アキコも無言。「話したい話題はたくさんあるけれど、あの姿を見たい。翔を思うのは昨日一日会わなかつたからなので、会ったらそれできつと何も語らず、顔を見るのさえまぶしくて、ただ抱かれない。それだけ」

居間に案内された。無垢板張り床に絨毯は敷きこまず、革張りの質素なソファが一つ置かれる。アキコと松木は隣り合わせでソファに落ち着いた。

西に向いた腰高の窓に面している。カーテンは窓の幅いっぱいにかかれていた。見下ろせば街の夜景が瞬く。街の灯りを越して遙か先の夜景、多摩の山々が月の明かりを受けて、黒々とした嶺線を西空にうつすらと連ねている。

二人の目の前に、一幅の夜の衝立が描かれている。「尖っているのがオオタケ、その左にミトウ、二人が特に詮索好きなのだ」

ソファから松木は立ち上がりアキコの前に立った。街と山の夜景を遮る黒い影の松木、その影が今すぐに乱暴に迫るかアキコは怖れた。影は祈る姿勢でアキコの膝に身体を落とす。両の膝かしら

を抱えその丸い熱さを愛おしみ、鼻をこすり付けた。両の膝かしら「山は語らないのだ。山は動かないのだ。夜の闇に稜線を見せるだけ、問いかけても答えない。語りかけても口を開かない、山が震えたと見たのは錯覚だ。山は聳えるだけ」

松木はアキコの膝をかかえ、膝の頭に唇を押しつけた。「無言だったのね。ヨシカズが山を見詰めながら、山に憐れを求めただけ、そうなのね」

「山は人など認めていない。無反応なのは、生い立ちを知れば理解できる。彼らは五千万年を生きながらえた。私は四十五年、彼から見れば私は砂粒なのだ。砂粒が揺れ動いて泣いたところで、山は憐れみを与えてくれない。」

「だからアキコ、共に住んでくれ」
 「あなたはこの山はここに住む私を拒絶しないかな」
 「彼は見つめるだけだ、住み暮らすアキコを黙って見るだけ」

アキコと松木は手を握りあい、眼下に広がる夜景を見ていた。松木がアキコに近寄り接吻を求めた。会議の後の力ずくの抱擁とことなる優しさを込めた自然な腕のとりまといに、アキコは身体のことわりを覚え接吻を受け入れる事ができなかつた。唇と唇が触れあつても、舌が絡まる濃厚な接吻を交わす気分ではなかつた。胸をもさぐる松木の指をアキコが再び拒んだ。

ホテンカケ：ホトトギスの一鳴きが裏山に響いた。

「ヨシカズ、今は駄目」

アキコは手を振り払い立ち上がり、片膝で跪いた。見上げる松木に両の手を堅くあわせた。祈りの構えだつた。

「ヨシカズ、私はここを出なければならぬ。今夜中にきつと戻る。お節介のホトトギスが私を誘う、外に出るのよと。ホトトギスに免じて、外出を許して。」

あなたを嫌っているのではない。好き、だから今は受け入れられない、今夜中にかえるから、きつとその時に」

「アキコ、ホトトギスはその夜の私をお前の寝室に案内した。今夜はお前が案内を受けける番だ。外で気の向くままに誰かと逢つて、夜が明ける前に帰つてくれ。鳥でない私は行くところが無い。ここでお前を待つ」

車のキイをアキコに預ける松木の声は震え、顔は泣いた。

「私が帰つてくるといふ人形」アキコは胸に差したバラを一本だけ抜き取りテーブルに置いた。選んだのは深紅のバラ、アキコの胸に黒バラが残つた。

新居に松木を残し出奔したアキコ。優先番号が執行されて搭乗できるのか居残るのかも分からず、会えるとただ信じるのみでバイパスに入った。

夜半をまわつたバイパス喫茶店。客入りは途絶え、ここに残るのは指で数えるほど、窓際に席を取れば奥のテーブルまで見渡せる。バイパス側の窓の脇に丸テーブルの対面チェアがいくつか並ぶ。アキコはその一卓に座つた。樋田からの返事を今かと待っていた。しかしテーブルに置く携帯は振動しない。

風が南に変わった、厚い雲が夜空を被い、星影は見えない。天窓を見上げると夜空はどんより重い。アキコは待ち疲れ、席に一人、寂しくなつた。

「あのまま松木さんの部屋に残れば彼の愛を受け入れる、それが正

しかつたのか」
しかし今喫茶店に一人で座る状況には悔いはない。翔との連絡は
いずれとれる、アキコを導く声がある。その後、聞こえてこないだけが
気になる。

この時間帯ではくだけた服装の来店者が多い。ティシャツにジ
パンの若者がゆったりとくつろぐフロアに一人ドレスを着して座り
こむアキコ。携帯を前にして意味も不明な独り言をスクリーンに向
かって呟き、その視線は落ち着かず、時折の苛立ちを隠さない。
フロアで浮きあがっていた。女一人であれば「カモにできるか」
と隙を狙う男は多い。いかがわしい目付きに晒されているとは本人
だけが知らない。

先ほど、足音がさがさとうるさく入ってきた四人連れ、窓際のソ
ファに席を取った。男三人に女が一人、年長の男は「カシラ」と一
目置かれ話しの筋を取りしきる。女が一人、ふくれ面で「もう帰る
よ」と彼女だけ遊びに乘らない。「男三人に女一人では釣り合いがと
れない」と女は拒む。カシラが「そんなケチな段取りにならない」
と反論する。

不機嫌をなだめて女を騙すに話の筋は尽きるが、あと一人女の手
当てはカシラにも腹案はない。

女の服装は薄手のブラウスにジーパンと普段着であるが、化粧に
念を入れている。眉を青く長く引き、瞼につけ睫毛を重く下げ、額、
頬、顎を白粉で厚く覆った。

化粧の趣旨は変身であろう、彼女を見知った者でも、その厚い塗
り層の下の素顔が誰かと気付かないだろう。足元を踏みあらして彼
らが入ってきた時、驚いたアキコは目を向けたが、彼女が誰とは気
付かなかつた。

カシラは女をなだめる。

「女と男が同数じゃ面白くないのだ、カップルが幾つか出来るだけ
だよ。いろいろと楽しむのが良いんだ」

「もう一人捜してきなよ。あたし一人でき、イヌみたいなガキが三
人じゃたままないよ」

「俺たち犬かよ。その通りかも知れないな。犬に似合った相方をも
う一匹、捜すよ」

女が一人座るアキコに気づいた。なぜ一人なのかと怪訝に思った
が、アキコの表情に陰しき、一種の諦めを見つけると納得がいった
のか、首を縦にうなずいた。

女はカシラに「あそこに一人座っている女のことだけど、そう黒
長い間女の話聞いて、最後にニヤリと鼻先をゆがめ笑った。耳を立て

「なるほど分かったぜ、そりゃ振られたのだ。そこをつっこむのが手口だ」

「無理ですよ、だってあの女は違いますよ。しかし若者は納得しない。」

「馬鹿ヤロ、やってみればいいんだ。乗ってくるかも知れない、必ず乗ってくるぜ。オレの手口に乗せちゃえばそれで決まりだ」

近づく仕草や話しかけ方を若者に教えた。手下は半ば脅され、それではナンパかけてみるかと若者はアキコに近づいた。勝手に前のストールに腰掛けてアキコをしげしげと眺めた。アキコは横を向いたまま、男には視線を預けない。

「お嬢、邪魔しますよ。お一人で喫茶店の暇つぶし、さぞかしつまらないでしょう。あそこに座っているのはみんな仲間だ、きもいやロ、ばっかです、メロも一人いるから安心してオッス」と指さした。

「チョイト楽しい遊びをするんですが、お嬢にも入ってもらえないかと」

見知らぬ若者、風体は野卑言葉遣いは乱暴、彼女の親しむ世界の人達とは離れている。なぜ私に話しかけたのと不安の眼差しでアキコは若者を見た。彼が指さすグループに目をやると、それは女一人と男二人の組み合わせで、向こうからはわっはっはと手が大きく振り返された。だらしなさにアキコはとも共感を持てなかった。

「楽しい遊びですって、あなた私を誘っているのね」

「お嬢、勤が鋭いね。土曜日だし明日は仕事無いんでしょう。はめ外して楽しく、みんなで呑んだり吸ったりで、とつても楽しいよ、入りませんか」

「私は人を待っているし、その会合に出ません。それにあなた達を知らない」

「俺は知ってるんだ、あんたがアキコだってね。そして彼氏が誰かもさ。そのチンピラヤロを待っていても来ないって、あんた振られたんだよ。」

俺たちなら振らない。楽しく朝までやれる。ここまで頭下げてるんだよ、それでも断るのなら力づくで連れて来いんだぜ」

名前を知られているのは驚きで、その上この男、脅しともとれる乱暴な口調に変えた。アキコはおもわず背中を振るわせた。しかし自身の姿を振り返れば、夜の喫茶店で一人長々と過ごしていた、携帯にかじりついていた無防備さには、あらためて身一つの震いがでた。

「お誘いありがとう、でも私は一緒にしませんよ。それに私が誰を待つかなど、あなた達には関係ありませんから」

アキコは席を立った。若者はそこでは深追いはせず、舌を出しながらグループに戻った。アキコと不良グループの接点はそこで一旦は終わった。第一幕が終わっただけで、アキコが外に出て、カシラは彼女の行く先を執拗に追っていた。次の作戦を考えていたのだ。

男達の視線に狙われているとも知らず、アキコは駐車場に戻り車に乗った。すぐに駐車場から車を離すのが安全なのだが、それを実行できない。喫茶店で翔を待つと伝えているので、この場を今離れたら彼には会えないとの不安があった。

運転席に戻っても発進せずに携帯を見続けている。遠目にも不安なればたき、一人フロアに座っていた目付きと変わらない。「これはめられる」と彼は見破ったのだ。

「あの車なかなかのモノと見えるがおめえ達知ってるか」
手下が答えた。

「外車です。前から見てあのインテイクの形で区別が付くけど、あのタイプは今時珍しい六気筒、すごいスピードが出るんですよ。女の運転じゃもったいない」

「あんた達、狙いはアキコだからね、車じゃないよ。車を奪ってちよいと乗り回して満足だなんて、そんなへたれだったら愛想つかすよ」

「分かっているって」カシラは女をなだめながら手下二人に指図を出した。

「もったいない女がもったいない車を背負ってる。狙いは女だ、車は行きがけの駄賃、合わせて頂いくんだ。おめえ等、今度は力仕事になるからな。手順は：」

力仕事とやらの手順を聞いて手下二人はなるほど頷いた。

「カシラ、その手筈なら完璧だ、畏にはまったのも同然さ」「そんなら俺たちはバイパスの路肩で待つことで」「あそこなら暗がりだから、力仕事でも邪魔は入らねえ」

「そうだお前達、アタマいいじゃないか。駐車場は明るい、人目があるから危ない。路肩は暗い、誰も見ていない。見る奴らだって時速八十キロでビューって通り抜けるだけだ」

「カシラ、覆面だけですね、やばいのは」
「覆面はいつも路上を見ている、路肩でスピード違反するヤツはいない」

手下への指図を終えて厚化粧の女にカシラが、
「お前はアキコだとあいつが言ったなら、あの女、顔色変えて車に逃げ込んだ。ナオの言い分が間違っていないのは分かった。樋田だとか

翔なんてヤツが大阪からは帰らない、このネタはこれからだ。タイミングは俺に任せてくれ」

「女はカシラの力仕事を脇で聞いていたのだが、まだ不満で立ち上がり様にけしかけた。」

「私一人じゃお前とは遊ばないからね、もう一人の女はあのアキコだ、アキコを手下二人でマワセばいいんだよ。ちよいと位の乱暴な手口取ったって訴えるものか」

「女と手下の二人は席を立った。カシラが喫茶店に一人残って運転席のアキコを視線のぶれもなく、狙い定めた狐の目つきで凝視していた。」

「何ほざいてやがる、手下二人に遊ばれるのがナオで、アキコはオレ様の女だ」

「女はなぜかアキコを知っている、その上「アキコが連絡しているのは樋田という若造だからね」とまで仲間に暴露した。彼女はジーンテック社の庶務山田直子である。目にはマスカラとつけ睫毛、分厚い塗り重ねの唇、金髪カツラを顎にまで垂らした厚化粧なので、誰も彼女が直子とは気付かないだろうし、通り抜け様を見たアキコだって気付いていない。」

「直子はバイパス橋で二人が抱き合う姿を携帯で写真にした。藤村に二人が交際しているかと写真入り封書を密かに作成した。総務部全員が離席している隙をねらい、封筒を部長席にそっと置いた。」

「橋の上の接吻、二人で旅発つとのコメントを添付して。藤村が封書を開け表情が曇ったのを何食わぬ顔して自席から見ていた。」

「厚化粧にカツラの直子のアキコは見分けていない。事を起こすのに好都合と直子は謀った。」

「待っているのは樋田に決まっている。予定では帰着している筈だけれど、何故か帰りが遅れている。」

「あるいは一悶着が起こって、樋田は帰ってこないと諦めてもいる。投げやりなら、それだけ隙がある。あの鼻っ柱を折るのは今がチャンス」

「女遊びにはやる男共をそそのかしたのだ。眨めたい、ただそれだけだ。男三人と直子は二手に分かれた。」

「携帯を見つめるアキコに明るい表情が戻った。」

「連絡取れた、翔からやっど返事が」

「しかし返信を読むうちにアキコの顔は再び険しくなってきた。」

「アキコさんに会いたいのだけけれど、会うと思う心が乱れる。会ったらそれが結果、今それが見えてくる、今夜だけのつきあい、将来が今夜に果ててしまふ怖れが。帰京し今帝都線電車に乗り込みま

した。お迎えには来ないで」

読み終わりにアキコは音声電話を入れたが交信できないところだ。アノウンスが流れた。樋田は帝都線の特急電車に乗ったところだ。「樋田くん、私から離れては駄目。一瞬でもたとえ一秒一分でも共に過ごす二人だけ愛を持たなければ。パイパス喫茶店の駐車場であなを待つアキコ」と音声留守録音送った。

最後に翔の裏切りを知ることになるのか。翔からの返信を待つだけのアキコは、期待もつぶされそのあまり、前のめりにハンドルに寄りかかった。

一方、特急に座る樋田は喫茶店で待つとの伝言を聞いていた。声を聞けばアキコへの思いはよりまさり、座り身ながらもだえを感じた。アキコに会わなければ、その気持ち勝った。

翔の心の中ではサキかアキコかの選択は、アキコをとすでに決まっていた。今の懸念は今夜会うのか明日に延ばすのかに絞り込まれていた。ここでもわずかに偏心があった。今夜会いたい気持ちは抑えきれないと知るだけに、アキコには今夜会う怖れを伝えた。

しかし彼女の返信は「それでも会いたい」これ聞いた心持ち方はさはさらに募る。「駐車場であなを：」で偏心していた心持ち方が一気に「今夜」に傾いた。

降り乗りも人の動きが納まって、ドアが閉まる直前、笛の一吹きがホームに鳴った、これで無事に発車となる「下ろしてくれ」と大声を上げて翔がドアに突進した。

閉まりきったドアに残ったわずかな隙間、アキコの運命を分けた。隙間は腕一本の幅だった。閉じきる寸前に樋田はそこに腕を挟み入れた。差しこんだ腕に全身の力を込め、引き戻す。ドアはびくともしない。ドアが閉まりきらなければ電車は発進しないが腕一本の隙間を管制装置は見逃し、スタートオーケーを命じる。腕一本をドアから生やした特急がするすると発車した。

「下りるんだ、アキコが大変な事になるんだ」
叫ぶ樋田にたいして周囲の乗客は「けしからん奴だ」「こんな乱暴で停車したら終着駅の到着が遅れてしまうじゃないか」と冷淡な表情で見下ろした。

冷淡な輪から抜け出た男が一人だけいた。翔と同年代、学生であろう。

「アキコって誰だい、なぜ大変になるんだ、」

「メールを今受け取った。助けて！って救いを求めている。アキコは私の恋人だ、たった一人の恋人だ」

このとっさに翔は二人いる恋人の一人はでなかった。口調には偽

りがないと学生は納得し、
「救いメールを恋人から受け取れば、誰だってドアをこじ開けたくなる。よーっし手伝うぞ」

彼もドアの隙間に腕を差し入れた。冷淡な輪が励ましの掛け声に入れ替わった。

「開けないとアキコが大変な事態になるぞ」誰もアキコなど見たことないが、この男の恋人と聞いてさぞかし美人かと羨ましがられた。アキコの人徳であろう。

「扉があくまでがんばれ」の励ましがかけられた。

「たった一人の恋人だって、羨ましいいな、俺なんか一人もいない」
「俺には五人いるけど」「嘘つくな、面の格に合った冗談で笑わしてくれ」

四人の若者が力づくでこじ開けた。樋田がホームに飛び降りた。たんにドアが再び閉まった。改札をすり抜けパイパスまで走った。走りながらも携帯を取り出して「あと十分かかる」と返事をメールに打ったが、アキコから再返事はなかった。

「あの女メール読んでいるうちに顔が陰しくなった。頭をハンドルに付けている。あんな格好で寝る女はいない。がっかりしているんだ、彼氏に会えなくて、やっとオレの出番が来たぜ」

指図の通りになってきた。男達に携帯で「野郎ども、始まるぞ」と連絡入れた。彼達は車をパイパスに移動はじめた。

「力づくでもかっさらってくるのよ。あの女はお前達二人のモノにしてやるって約束したからね」

直子はけしかけ続ける。

「お嬢さん、樋田からのメールで連絡があるのです」

見知らぬ男が窓をコツと叩いて携帯電話をひらりとかざした。アキコは

「樋田クンをあなた知ってるの、そこに彼のメールが来ているのと質した。」

男は耳に手を当てて聞こえない振り装った。助手席側から声をかけていたので、アキコはリモートで窓を開け「樋田くんがなんて言った！」と声を大にして質したが、これが油断につながった。なおも聞こえない素振り。男は開けた窓から乗り出し、身体をひねってロックレバーをつまみ上げ、どんとドアを開けた。すぐさま助手席に滑り込んだのはカシラ、

「樋田とか言う野郎がお前さんを路肩に連れて来てくれと俺に頼んでいるんだ。指図通りにしろよ」

「路肩で待つのですって」

駐車場からアキコごと車を引き出すのがカシラの算段で、手下に指図した「力仕事」とはそれからの行動になる。アキコを引き回して籠絡するのはバイパスの路肩。
 アキコは車からすぐに離れ、喫茶店に逃げ込まなければいけなかった。その行動を取らなかつたのは、樋田からのメールと騙ったカシラが上手だった。
 「ドライブスルーに車をゆっくりと回せ。バイパスに出ても本線に入ってはならない、路肩につけるのだ。青い小さい車が前に滑り込む、その車のすぐの後ろに移動するのだ」
 首を締め上げている手が怖いのか、肩をつかむ腕が痛いのか、アキコは男の言うなりになって、抵抗を試みなかつた。横暴さは気になるけれど樋田に会うのが第一の選択だからとドライブスルーに車を回した。しかしカシラの説明の全てに納得している訳ではない。
 「翔の姿を認めるまで我慢する。もし路肩にいなければ、そこで車を飛び出す」と覚悟を決めた。
 「聞き分けが良くなってきた、ゆっくりとだ。カウンターを無視するんじゃない、歯を白く見せてにっこり通るんだ」
 カウンター窓で車の出入りを見届けるウエイトレスは、白い歯を見せても、目つきが怯えるアキコに何かの異常を気づいたが、助手席の男の愛想いい笑いにたづなられて、脅されているとまでは思いつかなかつた。ドライブスルーを出て歩道を渡り左折でバイパス、路肩に入つてそこに待つのは樋田にあれとアキコは祈るばかり。
 頸を責められるまま横暴にも耐えて、左折して路肩に乗り入れた。
 「前に進め。お前にだって楽しみの準備は万端、用意はぬかりない。楽しみは酒と煙に男と女、夜から朝まで」
 これも聞き流せない、翔と楽しむのに何故酒と煙なのか、アキコはさらに不審を募らせた。

赤いクーペのまん丸四つ目、エンジェル目玉のスマートフォン灯、鼻先は怒り達磨のボンネット、そんな異形な車は滅多に走っていない。メール通りの車を認めて、樋田はやつとアキコに会えると安心し疲れが脚を襲って歩道にしゃがみ込んでしまった。車は遙かに遠く二百数十メートルの先。
 しゃがみ込んで目を車に凝らすと運転するのは女、それはアキコに見えた。しかし次にただならぬ異常に気付いた。
 メールではコーヒー店の駐車場で待つと。しかし車は歩道を越してバイパスに入ろうとしている。バイパスに入るとは、別のどこかに移動するためだ。何故駐車場で待たないのだ。さらに助手席に座る男の影が見えるのは奇怪だ。
 「おいアキコ、待ってくれ」叫ぶが遠すぎて届かない。

樋田は立ちあがり、再び走った。少しは近づいた。近寄れば車内
 雰囲気は怪しさが生々しく目に映る。助手席の男の手がアキコの首
 を押さえつけている。拳でアキコの頭を小突き回している。

男の暴力に耐えながらも上目遣いで進む先の路肩を見張るアキコ、

しかしそこに翔を見つけられなかった。
 「この男は乱暴だけではない、嘘つきで翔を知るとの騙り」と正し
 い判断が戻った。

「進め、もっと速くに」の言いなりにはならず、路肩入り口でブレ
 ーキを踏んだ。

「翔はどこにもいない、あなたは嘘つきで乱暴。許せない」
 右足でしっかりとブレーキを踏んで、路肩に入ったばかりの位置
 で車を固定した。

青い軽自動車グラクシオンを派手に鳴らしアキコのクーペに迫
 り追い抜き、前方路肩で非常停止灯を点滅させた、点滅の意味は赤
 達磨のクーペで待ちかまえるカシラに、用意は完了との合図である。
 用意とは力仕事を路肩で立ち上げる構えである。手下二人と直子を
 あわせた三人、うしろに控えるはカシラ、四人の戦い気分はいや増
 しに盛り上がった。

二台が縦に並んで停車したのだが、離れている。車間は十メー
 ルほど、軽自動車が前方に離れて停止した理由は、街路灯が明る
 いためである。水銀灯がその距離十メートルをしっかりと照り下ろして
 いる。

カシラは力仕事の仕掛け舞台に街灯の明るさまでは織り込まな
 かった。暴力に明るさは不要、軽自動車が明るい路肩を避けたのも、
 これから始まる仕事はバイパスの観客に、たとえ八十キロの通り抜
 けでも丸見えとなる不手際を防ぐ配慮だった。

「カシラ、そっちが前に出てくれませんか」
 手下が携帯から連絡を入れた。

迷惑通りにアキコクーペが進めば、暗い路肩で舞台の幕があがる。
 男三人が「えいほうえいほう」と腕っ節を揃えたら、アキコはク
 ペから降ろされて、軽に押し込められる。二台が発進してバイパス
 車列に混じったら、樋田がいくらか走っても追いつけない。幕はそれ
 で閉まる。

「もつとあの軽自動車に近づくんか」アキコを肘で突いた。

「樋田くんはどこにもいない。私は前に進まない」アキコはブレ
 キを固く右足を踏んでいた。私は前に進まない」アキコはブレ

泣きを入れた。
 「アキコがちっとも動かない。そっちがバックしてくれ」

「バックしますけど、ゆっくりでいきますよ」

おそるおそる路肩を後進し始めた。なぜ急速移動しなかったかというと、バイパスには覆面パトカーがあらゆる違反車を見張っている。ゆっくりの後進は見逃すが、路肩で高速バックなどはスピード違反よりもさらにおいしい摘発となる。

ゆるゆると軽がバックする、非常灯が左右にぶれている。ぎこちないその動きは、遠く後ろを走る樋田にも目撃された。

「あの車のバックする動きはさらに怪しい、アキコの車に接近するために違くない、アキコへの危険はまあさら迫っているのだ。早く行き着かないとアキコが悪の手にさらわれる」

まだ二百メートル離れている。

軽自動車が進んで二人の男が飛び降りた、アキコ車を囲む。カシラが助手席から飛び出て運転席、アキコのドア側に回った。車をぐるりと男達が囲んだ。前には軽自動車のバンパーが接触しているし、後ろには男が立つ。逃げ出すには後退するしかない。レバーをリアに移したアキコの手をカシラが叩いた。

「アキコ、危険運転はやめろ、後ろには男が一人立っているじゃないか。それでもバックするとは、手下をひき殺すつもりか。殺人未遂だ、アキコを引きずり下ろせ」

ドアを開けて伸びる男手は六本、女の身一つ抵抗虚しく、手を取られ脚をひかれ、すぐに運転席から引き出され、その身を路肩に曝された。

樋田は見た、引きずり下ろされたアキコを。そして距離が百五十メートルは残る。

「だからもっと早く走らんだ。アキコ、おい、翔がここにいるぞ」

樋田の叫びがやっと届いた。地に伏せるアキコは懐かしい声に氣付き目を上げて、迫る翔をしっかりと見た。

「翔、私はここよ、助けに来たのね」と手を回した。

男達も迫りくる翔に氣付いた。顔を真っ赤に染め、両の腕を振り回し、ぎゃーとの叫びをあげて跳んで走って赤い赤い迫る男にひるんだ。あっけにと取られて見ている間にも、怒りの赤鬼が迫る。お前達、はやいとアキコを片付けちゃい。あの鬼みてえな野郎がここに到着する前に。百五十メートルくらいは離れているから、手順良くやればアキコをさらって逃げ出せる」

「さすがはカシラ、冷静だ。じゃあこれからは手順通りで」

アキコを抱えて軽自動車に移すのが手順である。手足をばたつかせてアキコは「翔、助けて」と抵抗するが、女の細腕、力だけは我慢の手下二人にひよいと抱えられた。座席

アキコは軽自動車の後部席にたちどころに押し込められた。

からも「助けてー」と叫ぶが、直子に「なんて往生際がわるいの、翔はもう助けられないわ」

嫌みたっぷりのおざけりを受けたうえ頬を叩かれた。

ここで男達にちよつとした齟齬が発生した。歩道を振り返って樋田はまだ遠く、到着するまでしばしの余裕があるとカシラが判断して手順の変更をとっさに思いついた。

「手下ども、お前達は間違っている。そのちびた軽にアキコを乗っけるのは古いシナリオだ、新しいシナリオ通りにしろ」

「え、じゃあどこにつれて行くのですか」

「この高級クーペの助手席だ」その運転席にはカシラが乗る。見直してカシラの独断で仕組んだ新しい手順。六気筒の高速車を盗み、アキコを一人占めする一石二鳥の秘策だった。彼は一人、又ツ又とほくそ笑んだ。

「そんな手順は聞いてない」「うるさいぞお、俺がカシラだ、だから従え」

どんな妙手、奇手とされようが、この土壇場での急変は誉められない。

「それじゃあんまりだ」「アキコをくれるって約束したから、俺たちも頑張った。アキコじゃなくてナオじゃなあ」「比べてしまうと、すごい差があるからな」「うるせい、お前らにはナオで十分、おれがアキコを楽しんでからだ」「ふん、私だってすごいんだから」

カシラの手前勝手を聞かされて、アキコをクーペに戻す手下の力が鈍った。アキコの抵抗はより強くなって、クーペへの移動にはより「力」を出さざるを得なかった。余計に時間がたった。

「百メートルが残る、男どもがなにやら諍いをおこしているようだ。邪な行為を罪と反省しているのだろうか。いずれにしても走るんだ。跳んで走ってアキコを助けるんだ。」

一人で喋るうちにも距離は稼げる、十メートルが縮まって九十メートルが残る。

「オーイアキコー、ここだぞ」

「翔、見えているわ、あなたが走ってくる姿が、愛しいあなたの顔も、早く来てー」

「せっかくここまで連れこんだのに内紛でドジをかますんじゃないよ、さっさとアキコをクーペにとじこめな」直子までも路肩に出て男達を急かせた。

樋田翔の急迫も虚しく、樋田が見ている前でクーペ助手席に連れ込まれたアキコ、手下達に固く押さえ込まれた。助手席で泣くアキコに希望はもう消えた。残るは五十メートルと縮まったが、悪党側の手筈は全てが無事に完了した。諦めずなおも必死に走る寄る樋田

に、肩越し、カシラの余裕の一瞥、真つ赤な鬼の形相をせせら笑い、クーパーの運転席のドアレバーに手を掛け、
 「おい、お前達も軽に戻れ、アキコが騒ごと大丈夫だ」
 「ちえ、一人でアキコを楽しむんだって」
 不満やるかたないが、カシラには逆らえない。お下がりアキコでもナオよりいいやと軽に戻った。

路肩の舞台が今はねた。はねの直前に、幕の閉じを狂わす突発事故が発生した。カシラの手順とおりには納まらず、不完全燃焼の茶番で幕が閉じるはめとなった。
 一つの逆転はクーパー運転席にどっか座ったカシラをアキコが接吻の嵐で迎えた。女とは簡単に、これほど無節操に豹変するのか。
 もう一つはバイパスの珍事である。大きな丸い物体が路肩を転がり回って、車道にはみ出てあわやトラックに巻き込まれる惨事寸前となった。運転手の急停車で丸状物体は轢かれそとなったが、しばらくしてその丸めが縦に伸びて、人体らしき体型に変身した。
 二の突発事を出来なりに説明すれば、丸まって車線を転がった物体の由来とアキコの無節操な様変わりには納得が行く。

手下が不平を漏らしながらも、軽自動車に納まったのを確認してカシラは
 「者共、一気に出発だ」と指図の右手を振り回した。
 運転席のドアを半分だけ開けた。タンニン染めの革張りシートが街路灯をぬらり反射した。この艶めかしい運転席だって、俺を待っているのだとうぬぼれた。

いざ乗り込まんとカシラは背を丸めて半腰になって、尻も丸めて半尻に構えた。その半尻を運転席の革シートにズサリと置いて、ハンドル握ってアクセルをビューン。その先は楽しいだろうと思いを夜にはせれば思わずニタリと笑いがこぼれた。この笑いが余計だったかも知れない。半尻はまだ落としてない、半腰で半尻、これほど無防備な姿勢でニタリするのは余計どころが大変危険だ。

軽自動車は非常灯の点滅を消して「発進するぞ」でルームミラーのクーパーを確認した。ドアが閉まって運転席に男が座った。するとアキコがすぐに運転男に抱きついて、頬に額に接吻の雨を浴びせた。車内のライトは灯されてないけど、影の動きで二人のいちやつき様が見える。

「アキコがよ、なんだよカシラに抱きついてやがる」と運転席の手下。
 「アキコが抱きついてたって、驚く事もないよ、色好みなのさ、橋の上でもいちやついてたから」

助手席の直子は一層不機嫌になった。さあ出発だとアクセル踏むその時なんと、発進を妨げるかに丸形物体が車の脇をくるりくるりと高速で転がった。その回転速度を高速に保持して路肩をピヨンピヨンと跳ね、クルンクルンと回り進んでいった。巨大なサツカーボールかと思えた。物体がクーペの脇から急発進した事実、半腰のカシラが突然姿をくらませた不思議な現象、それらが同時に発生したのだ。軽自動車側では、ミラーからカシラが一瞬だけ見えなくなったが、身のこなしはいつも速いから消えたのは錯覚で、運転席に収まってアキコの接吻を身に浴びている果報者は、やはりカシラと素直に理解した。では回転体とは何か、あるいは誰か。

「出ようとしたりおかしなモノが車のすぐの脇を転がった」
 「何が転がっても気にしないでまず出発しなよ、樋田に追いつかれるとやっかいだ」
 「ヤツの姿はもうどこにも見えないから気にしない。そこらの歩道でくたばっているのだ。しかし俺には転げた何かがあるんだ、転がりながらヒャーオウって悲鳴をあげていた。その悲鳴はどこかで聞き覚えあるダミ声なんだ。」
 越えてコロコロ車道に入ったぜ」あれ、今度は路肩を「訳のわからない物体が車の間をクルクル進んでいるのだった」直子は首を伸ばしてバイパス車道を見回した。
 「本当だ、転がってる。大きなトラックが見逃さないぞって、回転体を追いかけている、あー巻き込まれるー」
 トラックは手前で急転、急停車したから、回転物体が車輪に巻き込まれる惨事は避けられた。しかし二車線を斜めに塞ぐ位置で停車しているの、後続する車も急停車を余儀なくされた。幾十台がかった。長い渋滞が出来た。渋滞のなかで接触、言い争いが発生した。
 先頭には寸前で助かった回転体が転がりやを止めていた。丸胴体からは人、男だった。首と頭が伸びて立ち上がった。回転体の正体を混乱の原因はこの男が身を丸めて転がった珍運動にある。大渋滞を引き起こしたバツ悪さを隠すのか、肩を怒らせて袖の埃をはたきながら路肩に戻った。謝りなしに去る礼儀知らずの冒険者に、怒りのクラクションが大合唱で鳴った。
 「転がっていたのはカシラだった。格好悪いな、こっちに来るよ」
 「ええっ、じゃあクーペに乗りこんで、アキコに抱きつかれている男は誰なのよ」

直子の指摘は気になる、手下がルミラーに目をまわすとクーペはもう見あたらない。とつづくに脇をすり抜けて、渋滞の先頭に出て走り出したクーペをカシラ回転騒動に気を取られて見逃してしまった。「でもなんでも、ヤツがみっともなく転がったの」直子の疑問はもつともだ。

答えるには回転運動体の出だしと、直前に発生した二体の衝突、結果として飛行エネルギーが回転運動に全置換した渾身の突撃を説明しなければならぬ。

カシラは二の間違いを犯した。拘引する手と押さえる腕の力が抜けた。それだけ余計に時間が掛かった。

もう一つは樋田の火事場的土壇場の力である。出発の用意は万全。「どうだ、お前は追いつけなかつたぜ」と振り向き嘲笑したカシラの顔憎しで、樋田はさらに根性をこめて走った。距離と手順の見極めが最後に破れ、樋田に追いつかれた事情である。

しかしこれら二は間違いだったとしても、実は重大ではなかつた。なぜならカシラが乗り込む半腰半尻のときに、樋田はまだ三十メートルを残していたからで、彼に言わせれば「手下どものサポーター」ユまで織り込んでいる「シナリオ」だった。

回転体におとしめられた原因は、最後の最後、彼の面構えにあった。三十メートル離れている樋田に対して、カシラは乗り込むだけ。

樋田が手を振り回して迫ってこようが、手順には一つの瑕疵もなく、女と車を盗み取った。

「お前、少しだけ遅かつたな」とは言わず、その侮蔑を顔ににじみ現した。

これをドヤ顔と言う。関西の風俗らしい。インターネットにも出現している。大工左官など職人が難しい仕事をいとも易しく解決する。弟子に「ワレ、デケヘンヤロ、ドヤ」と自慢する顔つきだとの注釈がカイシャされている。

上位者が劣者にみせる侮蔑。その顔つきを樋田に投げつけてしまった。

樋田は怒った、残りの三十メートルを風が抜けるかに走りきって、直前の数歩を、戦車ミサイルのホップアップ弾道よろしくひときわ高く跳躍して、その体重と飛行エネルギーを身体ごと、カシラの無防備の半尻にぶつけた。「無慈悲な鉄槌を振り下ろすぞ」と己の身を犠牲にしてぶつかったのだ。

峻烈な衝突だった。スピードをおとすなどの容赦を悪党に恵むものか。走り込む速度で飛び上がって頭から、カシラに半腰めがけて

身体ごとぶつかつた。六十キロの重量体が六十キロの高速飛翔に増加され、半尻の無防備姿勢に突入した。重量と運動エネルギーが全てカシラ身体に置換した。

カシラは哀れ、尻、背、首に頭、これらが身体に沿って丸まって、あたかも巨大なサッカーボールになった。

エネルギー保存はこの修羅場でも法則の決めるところに忠実だった、減衰もなく回転運動に置換した。飛び跳ねながら二十八回転を遂げた。カシラが跳ね出されたその地点が座標の中心だった。クーパーの半ドア脇には、樋田が何事もなかったかのように立ちおもむるにドアを開け座った。

抗議のクラクションを背に受けてバツの悪いカシラが軽自動車に戻った。

「カシラ何が起こつたの。転がりまくるしクーパーは消えている。後ろがみんなカシラをバカヤロって大騒ぎしてるよ」

「うるせい、何が起こつたかだって、俺がようこうやって座り掛けたんだ。そしたらよう、こんなに丸まってくるり回つたんだ。その理由は俺だってわからねえ」

「あたしも帰るわ、あんた達男の三人で遊んで」

「助けに来たぞ」アキコは不明の影にしっかりと抱かれた。不良共が力づくで押し込めた腕のこわさと比べれば、とても優しい抱擁だった。

「泣き濡れた私の目に見える世界は滝の色、浮き出て滲む視野だからあなた誰か分からない。でもあなたは愛しい方と聞こえた。彼はいまだ遠きバイパス歩道、走っても結局は間に合わなかったのよ」

「このハンカチで涙を拭いて、とくと私を見てくれ」

「拭いても涙はすぐ湧いてくる。あなたは見えないけど私、声を聞くだけで愛しい方と分かつたわ」

ハンカチ渡すその手を払って男に飛びついたアキコ、接吻の雨を降らせた。

二人が抱き合う姿がルームミラーに映って、手下の首をひねらせた。

樋田を横にしてアキコはひとまず安心した。そしてしゃくり上げ始めた。アキコが不良達の追跡を怖れ泣くのかと思つて、警戒の目はミラーに絶やさない。それは樋田の誤解だった。

夜のバイパスに渋滞は発生しない。一本道をひたすら速く走り続けるので、不審な車が迫つてくれば、ミラーに浮き上がる。そんな動きの車は見あたらないし、追いかけてようとしても不良達は軽自動

車、四人が満載するならば六気筒クーペに追いつくと考えられない。

見張るミラーに翔は青い軽自動車影も認めない。

「もう安心だ」と翔はアキコを慰めた。慰められても泣きじゃくる。アキコ、喉を詰まらせて、

「翔、私は追われている」こぼれる涙をみせた。

「アキコ、危ない一瞬があったけれど今は安心してくれ。不良共はこの車には追いつけません」

アキコの不安とは、路肩で追いつめられたさきほどの事態とはもはや別次元の怖れである。ある者がアキコを追いつめている。それは二人だ。

二人の追跡者のその一方に涙目を向けた。

涙の粒は大きく熱く、目頭と目尻から滴るに任せて頬と頬骨に伝い胸に落ちた。しゃくり上げてアキコは沈黙する。翔が助手席に振り向けば、そこにアキコの目と唇が吐息を荒く迎えて、己の横顔をひたすら凝視していると気付いたはずだ。

バイパスの中間点を越した、しばらく進むと橋の上りにさしかかる。先週の同じ土曜日、歩いて二人が越えた橋である、翔はアキコのマンション方向に車を進めるが、アキコはハンドルを取って、

「方向を逆にして、今夜、私は帰らない」

アキコのマンションは低地側に位置する。逆側とは丘陵と山、翔に山に向かってと迫ったのだ。

「逆方向に切り直す」分離帯の合間をうかがい翔はウターンした。

「翔、このままこの道を進んで。目も眩むスピードにあげて、エンジン唸りをまき散らしながらうるさく走って。このバイパスは助走

なのよ、空に舞い上がるための助走だから」

「空を飛ぶ助走だと言ったね、私に見える空に上がってくれ。空のアキコを見上げたい」

「あなたと一緒に空を飛ぶのよ」

開け放たれた窓からは様々な騒音が入ってきた。高回転をあえぐピストン、軋むチェーン。路面のこすれに風のざわめき。窓に渦巻く風、アキコの耳に痛いばかりに入ってきた。アキコは窓を開いた。ままた外からの音に耳を傾けていた。

翔の耳元に囁いた。

「小さい声なので聞き漏らしてしまふ。四方に耳を立てているけれど聞こえてない。そのうちにきくと聞こえる。お節介でいけ好きない、けれど今夜けたたましく啼くのは許すわ」

終点が近づいた。突き当たりは右か左の分かれ道、右に取ればそ

の先は街灯の明るい市街。その市街への接近を便利にするために開道したバイパスだから、右に向かう車道は幅広い。左をとればすぐに丘陵地に入り込む。道幅の狭い裏街道となり、周囲は丘と林、街灯はまばらで人家は見えない。

「終点が近づく。車線をかえずこのまま維持すれば右回り、街中に入りこむぞ」

「まだ決められない。でももうちょっとで右か左かが選べるわ」

案内を待つアキコに聞こえるのは、車の走行音だけだった。車線移動不可の黄色帯が出現する寸前、風切りのザワザの音に混じって小さくやっと、待ち望んでいた一啼きが聞こえた。「ホテンカッケケッケッケ」ホトトギスの夜啼きが左の遠くに聞こえた。

「車線をかえて、左よ」と叫んだ。と同時に「そっちだと思つていた」翔はハンドルを切り、車輪は黄色帯の始まりを踏み越えた。裏街道を取った樋田、行く手に小高い丘陵が聳え、中腹から尾根筋まで藪に被われている。その辺りからさらなる一啼きが聞こえた。「ホッテンケッケ、コッチコッチ」

丘陵の藪のどこかに彼が潜みアキコを誘う。誘いのその先には愛の語らいが待つ。

太股にじんわりと汗がにじみ出た。

狭い街道をしばらく進むと街路灯もまばらとなり、通行する者の姿はすっかり消えた。夜半はとつと過ぎていく。詰まりは道ばたの小さい駐車場、音も立てずに入った。自然公園に付属する駐車場である。駐車場の車は見あたらない。その最奥、木々が落とす影があたりを隠す一角にクーペを止めた。

「行く先を思案している私に、幾度もおいでと啼いて、もつと奥よとさええずり誘った。彼はこの藪のどこかで遊んでいる。一緒に遊ぼうと誘う」

二人は共に車を降りた。先を取ろうとする樋田をアキコが止め、目指す藪先はあそこ指さした。そこは何も見えない空間だった。屋ならばアキコが指さす先に広場、ベンチ、芝生が目にとまる。さらに奥には昆虫池や小径が見渡せるのだが、明かりの一つ灯らない園内は闇の空間がひろがるだけだった。

出入り口は五時に閉じる。門扉の脇に一人が抜けられる幅で隙間が残る。春夏にはこの時刻はまだ日も高いので、園内に居残り遊ぶ人も多い。閉門に間に合わなかった訪問者を闇に閉じこめないために隠れ抜け口である。

アキコはかつて裏山の遊歩道でハイキングを楽しんだ。終点がこの自然公園。閉門に閉じこめられたが、年長者の誘導で隠れ隙間から抜け出た。

門柱に隠れた隙間を目ざとく見つけて、ひらりと抜け夜の公園に侵入した。進んでは振り返り、振り返っては進む。その度に樋田に「こちらに来て」と手をかざす。樋田はその手が闇に振られて指の白さが闇に舞う様を目印にアキコを追えば、二人は一人と暗さに溶け入った。

中心に窪み左右は斜面。傾斜は底面近くになだらかで、尾根に向かつて急峻に立ち上がる。この地方で谷戸と呼ばれる地形と植生を自然のままに残した公園である。斜面には笹と茨、灌木、雑木が茂る。小径に足を忍ばして、踏みしめを頼りに急傾斜にあえいで、人の肩を越す笹に頬を打たれて驚く。夜なのに星の瞬きが頭上に絶えたのは、高藪の繁みに迷ったからだ。足先に転げる小石の影を見すかせないのは、星光りも差し込まない谷戸の奥にさまよい込んだためだ。踏みしめるのは落ち葉の滞積に変わった。前に行くアキコの足音はサクサクと小さくて、残り火が風に揺らぐように聞こえなくなつた。目先の奥を見極めようとて、黒の広がりしか見えない。「アキコ……」と翔は止まった。「ここよ」で歩きを戻す。

闇をも怖れずアキコは進む。後ろ姿にすがりつき、消えてはうろたえ、戻ればひたすら追いかける樋田。アキコが振り向き近寄り翔にささやく。「歩き続けるのよ、前を見続けるのよ。さもなければ私を逃す。逃げればそれは今夜の別れ、もう愛は語れない」。谷戸の斜面にさしかかり登りの小径を続けた。行く手、星明かりの夜空を背景に尾根が見えた。稜線越えはもう間近。尾根を越えて向かいの斜面からはつきり聞こえた。「ホテンカケタカ」二人が目指すのは、分水の尾根を越した向こう向きの斜面だと告げた。

アキコの白い脚が消えた。思わず樋田は足を止め、アキコを求めようと口を開けたが、闇間の静けさを騒がす叫びを躊躇した。黙り止まると自分の辺りに人が近寄る気配を感じた、樋田に見えないけれど暗がりには隠れ、静けさの中に足音を殺して忍び寄ってくる。「私はこちらよ、見失わないで」。アキコの声だ、呼びかけてきたのは小路を外れた笹の茂みだ。怖れるものかと樋田も笹に足を踏み入れた。隠れては現れる白いふくらはぎを追いかけた。笹の茂みが開いて稜線が目の前に浮きあがった。二本の白い枝が夜空を舞うのを捕らえた。白枝と見えたのは稜線を進むアキコ脚だった。

尾根は南北に流れる、東側の入り口から登って尾根を西に越えた。目の前に西向きの斜面が広がる。樋田も稜線に立てた。影がふわりと飛んで、闇から生えた手が樋田の腕を掴んだ。アキコだ。

「月のない夜空。西の山はうっすらとしか見えない」
小屋が尾根筋に立つ。アキコは、「中に入るのよ」と樋田の手を取り、二人して内部に足を入れた。谷戸に遊ぶ水場を観察する鳥見小屋である。

入り口は尾根道に面するから入るは易しい。向かいの壁側は急な下り斜面に臨む。斜面の最下部に芦が繁る沢がくねり、沼が谷底に広がる。壁には四方二十センチの穴が三つ並んでいるが、これは鳥見用の板張りの跳ね窓で、見下ろせば沢に遊ぶ鳥を観察できる。窓の下にはベンチが置かれている。

手探りでアキコは入り口引き戸のかんぬきを閉めた。今時に尾根路を歩く者はいないし、天狗でも酔狂に入ろうとも、戸を開けられない。窓側は急峻な斜面だから近づけない。誰も覗けない。

跳ね窓は三穴とも閉まっていた。夜空明かりすら途絶えた暗闇に二人が相手を求めて手探りで蠢く。

前に立つ相手はボヤとも見えない。樋田がアキコはこと見当つけるのは、肌の放熱、息の遣いそしてアキコの生臭さからだ。体内生理の活動が肌からそして吐息から放出されている。性的に興奮して、女の性器官が熱にたきつけられ、あえぐ苦しみのなかで放たれる匂いである。

密閉の空間でも脇から股下から、アキコの悩ましいさが樋田を襲い、私はここよとアキコの居場所を知らせた。手を取り合いベンチに座った。

「皮膚の熱さだけを感じている。それがとても気持ちいいわ。見えなくても座るのが翔とは、馴染む肌の親しみで分かる。ここがやっ

とつくれた二人だけの世界、誰からも見えない密閉の空間なのよ。

「闇に二人を閉じこめたホトギスがアキコならば、小屋の内を神が覗こうとも見えるものか。アキコと過ごすこの時のこの場で真実

の愛を語ろう」

アキコは樋田の手を取り頬に当てた。頬の熱さを翔が慈しみ、その頬をさすりそして顔を近づけた。翔の顔が鼻先をかすめ頬に触れたのがアキコはうれしく、フーッ長い吐息とアキコが吐いた。唇から漏れた息は樋田の鼻先を抜けた。吐息の吹き流れには女の情の高

ぶりがさらさら籠もり、密室に女の生気が漂いむせる。アキコは翔に覆い被さり、その唇をねっとり嘗めた。橋の上の接吻の返礼だった。

「口から出る言葉が真実、一息でも嘘を、一継ぎの息でも偽りをまじえてはいけない。本当の愛を身体と想いの切なさで闇にさらけ出す」

「アキコ、二人だけの闇、その奥に控えるのは宇宙の闇だ、真実に誓って愛を語る」

アキコが愛を語り始めた。

樋田が去ったあとの松木事務所、誰もいなくなった会議室、松木が突然に抱擁した。勃起した下半身がアキコの尻にグリと押しつけられた。とつても嬉しかったという真実。

昨夜は身体が熱く眠れずうなされていた、メールで樋田を一旦突き放し、心変わりにすがる移り変わり。松木と森の中の夕食。新居の居間、泣きながら求愛された。

「私は今晩中に松木さんに帰らなくてはならない。彼の愛を受け入れるため」

樋田はアキコを抱きしめて、

「アキコ、お前の真実は悲しい。これほどにお前を思う私がいるというのに、お前だって翔を好きなのに、別の愛がこの夜にあるのだから、別の男と今晚愛を交わすなんて」

「彼からの愛も受け入れるアキコを許して。」

しかしお前にかける情けがなんとも強い、お前によせる思いは恥ずかしくてもやりきれなくて、彼の腕を抜け出して、ホトトギスの啼きをたどればこの小屋で逢瀬を持てた。この先一生お前に会わない、だから愛を灯そう、この闇に」

「お前を誰にも渡すものか。この一晚、二人だけこの小屋で語りあい、愛を尽くして一夜を過ごそう」

「お前から愛の告白を待っていた。ここで過ごす一時は全ての私がお前のもの。女生身の全て身体、お前にこの私を与える」

樋田はもう離さないとお前にお前の身体を強く抱きしめていた。その腕を外してベンチを立ち、アキコは壁に寄りかかった。彼女の位置は閉じている跳ね窓の脇、アキコの姿が闇に溶け入ったので、樋田は見失った。

その時夜空で異変が発生した。東の地平から下弦の月が登った。星空が月夜に入れ替わった。

異変をアキコは待っていたのか、穴窓から跳ね板を上げた。月空の照り明かりが冷たく穴から差し込んだ。窓穴の遠方に多摩の山々が、東からの月明かりを受けて夜空に黒く浮き上がった。

「ホテンカケタカ」

ホトトギスの一啼きが谷の底からふけ上がった。

アキコの立ち姿は、月空明かりの返しを身に染めて、死者がそこ

に立つのかと怖れるまでに青い。浮かぶ青い腕と青の脚のほの暗さは死者の陰りか、それならば顔を刻む髷の黒い影は生者の驕りだらう。口を閉じるのを忘れて、樋田はアキコの脚の青、顔髷の黒を見上げた。アキコは半歩、また半歩と樋田にじり寄った。目は吊り上がり唇は引きつる。苦い笑いで翔を誘惑する。振れもしないアキコ目つきは「お前を逃さない」と迫った。見下ろすその目は一点だけ、翔の眼差しに落として彼の目の向く先はどこかと凝視していた。

にじり寄りながらアキコはスカートを両手で取り、裾を一センチ二センチとたくし上げた。脛だけが見えていた脚が膝まで露出され、さらに裾はうねりあがる。

「隠す奥にはアキコが宿る。アキコの情けがその辺りに潜む。そんなつまらない物など、まだ誰にも見せていない。隠されたあそのこの熱のとろけに舌鼓を打った不届き男など、この世にいない」

スカートの裾は膝を越えて股に達した。膝から続く肉の太さがふつくら開く腿の中間、その高さで裾が止まった。翔の目はアキコの腿の付け根に釘付けになった。太股も脚も青く、なんとも艶めかしく光る。

「だから隠したアキコをお前に見せる、そして全てをお前に与える」

さらにセンチにセンチを越して裾がたくし上げられた。

股の付け根とその上の驕りしか残らない。たくし上げる手は戸惑い見せず、最後の一めぐり、付け根と驕りまで一気に上げたら下半身が剥き出しとなった。下に何も着していない、見えるだけ全てが裸の下半身だった。太股、股間が闇に青く、なお白く浮き上がった。

見せつけながら、なおも翔にじり寄るアキコ。目を光らせてもその部位をそらさず下半身にその視線が釘付けになった。

「夕べの風が心地よく、ふと許したお前の抱擁。あの時のあえぎの声は偽り。胸をあんなに強く抱かれても、腕をきりりと押さえられても、抱き合う吐息が私の偽だったから、お前を許す。

しかし唇だけは許さない。唇が私を崩した。頬に額にそして口にお前の熱い烙印を押しつけた唇。愛は熱いと真実を伝えたお前は許さない」

座る翔にじり寄り、アキコは裸の下半身をベンチに晒した。二人の位置が変わった。アキコの前にはひざまずく翔、アキコの腿にしがみついている。アキコは翔の後頭部に手を置いた。股を二つに割って、膝の内に分け入らせようと翔の頭を引き寄せた。スカートの裾ごとすべてが臍までずり上がった。

股の内に進む翔の前には剥き身の下半身が熱い裸を見せる。翔の唇がアキコの外性器に近づいた。焦がすほど熱い唇、それが今、女の最も敏感な部位を灼熱で狂わせようとしている。

「許してくれアキコ、このようにしかお前を愛せない」

内股に垂れるはアキコの汗か身体の脂か。舌のねぶりをねだるは女性の熱さも昂進しているからで、外性器の縁で分泌の滴りと脂のじみ混じりあえば、花卉の重なりに翔の舌がずると熱さにはいずる。

翔がしでかしているのはアキコへの蹂躪でしかない。太股の付け根への狼藉が熱にとろけて、もういささかの抵抗もアキコは試みない。開ききった股の最奥の肉壁はただ奔放で、舐める執拗な愛撫に股関節まで弛緩している。

アキコはフーと息を吐いて、頭をのけぞりながら首をしならせ肩を震わせた。二の腕は松木の頭を離さず抱え、股の奥にさらには引き寄せそれでも許さず、翔の頭を股間の罨の挟み込み、離すまいと強く押さえた。唇のはいずり回りがある部位で止まった。そこは陰唇の狭間、奥の庭。とどまる唇の熱さがアキコに伝わる。焼き焦がす熱さにアキコは泣いて悶えた。

愛は卑猥だ。下半身で遊ぶ愛人達の姿態は、見せつけるにうつつけの乱れ様だ。この痴態に愛が宿るなら、見せ開くのは二人の真実、そして見せつけるのは多摩の山である。

高まる熱さに耐えかねて、陰部は翔を身体に招くのだが、すぐに挿入を許さなかった。その手でアキコは陰茎を握りし、固さ熱さを確かめて、押し当て好みの位置にずり上げ、また押し当てずり下げた。熱の烙印を押しされた秘部、熱にただれ癒しを求める部位に、陰茎の先端をなぞった。大陰唇の内壁にゆっくりとこすり上げ、尿道口をなぶりながら陰核に押し当て、そして陰唇にずり下ろした。その行為を繰り返すのは火照る熱さを和らげるためか、さらなる熱の烙印を求めるのか。繰り返してはそのたびに、翔の亀頭の裏面が陰唇に擦れて、摩擦の快楽がアキコにも翔にも固く走った。

「許さない」とアキコは叫んだ。二人は自然の交合に入った。組み敷かれ開かされ、責められて苦にあえいだ。翔が果てて精を放ち、そのほとばしりを身体で知れば寄せるは大波、快楽にさらわ

る。鳥見の東屋、ベンチに身を横たえ両腕を床に落とし、愛の後遺で下腹と内股が小刻みに震えていた。アキコは穴窓の外夜景を見てい

ある。幾筋かの谷が月の明かりに浮んでいる。身じろぎさえしないから、アキコがその遠方を見捉えているのは確かだが、目に写る景色に思いを寄せていなかった。多摩の夜景を見つめても、それと異なる心象を臉に描いていた。心の景色がそこに忍び込んでいたのだ。それが目の前の外の夜景とすり替わっていた。

心が見ていたのは砂漠だった。見渡す限りに地平がひろがり、光の一つも灯らない闇。地平を見渡しても、人の生きる痕跡、一切の人工物は見えない。城壁、回廊、噴水、人の足跡すら見えない。砂と瓦礫の荒れ野が足下から始まり、ただ四方に広がり、地平の先にまで広がり、果てしない遠方、視線がとぎれる彼方で消えた。

捨てられた千年王国、忘れられた聖なる都、砂漠に埋もれた城郭。アキコは快樂の果てにサハラ、マリ砂漠のツンプクツの幻影を目撃した。

なぜツンプクツなのだろうか。あまりにも愛の快樂が強すぎたので、身体が無重力空間に解放されたと感じた。次に心も無重力に解放された。心と身体が解放されて宇宙に飛び上がったとアキコは錯覚した。ずいぶん昔に、写真集で見た荒廢のツンプクツが記憶から引きあがった。すっかり忘れていたのだが、千年王国の聖都の荒廢はあまりにも衝撃だった。記憶の底にしまわれていたその荒廢が、無重力の彷徨のさなか心に浮き上がった。荒廢を心が思い返したのだ。

愛の結末に快樂の嵐が吹き渡った。忘我を体験すれば、それは先がない終着で、快樂を踏み越える何かはもう無い。

終着にたどり着けば、そこには心の絶望が待つ。その心象に風景に喩えればそれは荒廢の四方、無人の砂漠、見渡しても何も無い地平。ツンプクツにアキコは降り立ったのだ。

日付が変わりさらに数時間が経過した。聞き慣れた車のエンジン音を松木が聞いた。夜が明ける前に帰るとの約束をアキコは守ってくれた。迎えると、松木の胸に飛び込んできた。

アキコを見て松木はその変容に驚いた。劣化して老弱化したアキコであった。

張りのあった頬はこけ艶を失い、眼窩は青くくぼみ、奥の虹彩は輝きを見せない。着衣はいくつもの皺が残り、スカートには泥がこびりついている。

マンシヨンから出てきたアキコは若さを誇らしげに見せていた。レストランで森の反射を受けて、生きる輝かしさを振りまいていた。輝いたアキコは微塵に壊れ、汚れた寡婦、疲れた老女が戻ってきた。

「すっかり変わり果てたお前の姿、苦しかったのか、転んだのか」
 「ヨシカズ、ホトトギス夜の彷徨、苦しかったけれど転ばなかった。」
 辛かったけれど空を飛んだ。やっと空を飛んだのよ」

嬉しそうに張り上げた言葉のすぐ後はしゃくり上げるだけだった。
 空を飛んだ代償に肉体の疲弊と心の屈辱を経験したと松木は知った。
 「アキコ涙を流せ。こうやって胸を合わせてお前の悲しみを分かち合える。何も問わない、お前の苦しきだけ分け合おう」

「あなたを離れた数時間、もしかしたら転んだ。惨めな想いしか今は残らないけれど、私は泣けなかった。なぜって空を飛んだから、そしてお前を受け入れるために戻ってきたから。」

私を抱いて。飛ぶために穢された私の全身、それをあなたに開く。
 夜が明ける前にこの身体を抱いて「アキコは服を脱ぎ捨て絨毯にうつぶせになった、背と尻を松木の目に曝した。」

「私を後ろから抱いて、項、背、腰とお尻、それらを愛して」
 松木は初めての性の行為に後背位をとるには躊躇した。しかしアキコは仰向けの裸体を頑なに見せなかった。その代償にバラ一輪をアキコの背に置いた。アキコが出る前にテールに置いた深紅のバラ。バラを巻き込みアキコを後背から抱き、後背のまま挿入した。

居間の窓は開け放たれていたの、西の山々が見えた。公園の鳥見小屋の窓穴から見た同じ山の連なりだった。抱かれながらアキコは妄想に囚われた。

松木に愛されているはずなのに、後ろから挿入してくる陰茎は翔と感じていたのだ。その部分の太さも形状も、固さ熱さまでも全く同一なのだ。それに気付いたから以前から抱いていた疑念を、交合のさなかに解決できた。

「身体の熱さも肌の張りも同じ。翔とヨシカズは同じ人。ヨシカズが一人のエゴで翔は彼の幻」

一人の男が幻想の二人劇で私を欺いていた。

一晩に二人の男に愛されたのではない、そんなふしだらな女ではないわ。私が愛したのは一人だけ、行為は二度あって、前を愛され後ろを今愛されている。それはヨッチャン」

その男、二人を一人にした空想のエゴに救いをアキコは見つけた。

腕にアキコを抱きながら短い眠りに陥った樋田、目覚めたベンチにアキコは消えていた。胸のポケットに黒いバラが差し込まれていた。立ち上がり引き戸を開けると東の雲は白い、朝はちかい。

就寝の遅いサキは、遅くまで動詞活用を表にして整理していた。夜明けをそろそろ迎える頃合いを時計の針が示した。三度のメールを翔に入れたが、返事が来ない、もう夜が明ける。

翔がサキを訪れるなど、もはや期待していない。
 服を替えずにベッドでまどろんだ。チャビの悲しげな鳴き声が庭
 で立ち上がり、サキは起きあがった。チャビの悲しげな鳴き声は
 庭から、タヌキムジナなどの野生動物が時折尾根を下りる。そのた
 びにチャビは唸り声で縄張りをあからさまにする。庭から、夜ごとの
 庭からの鳴き声あればチャビに他ならないが、夜ごとの威嚇の唸
 り声とは異なる、哀しみを訴える鳴きである。部屋の灯りを消して
 戸をわずかに開けた。チャビは庭にはいなかった。階段を下り門扉
 に向かつてなにやら訴えていた。カーテンの隙間から見下
 すサキに男は気付かない、しゃがむのは樋田であった。

チャビは尻尾を大きく振り、樋田に入れとせがむ、奇妙な鳴き声
 はチャビのあまえ吠えだったのだ。その翔に声はかけまい、迎え
 にも出ない、私は自室から離れまいとサキは決心した。今頃にな
 ってやってきたのは何かの間違いで、サキの懇願メールを読んだ
 からは、そのうえもう夜が明け、こんなな待たせても、サキの怒り
 も我知らずにチャビと戯れに立ち寄っただけだと自身に言い聞か
 せた。

「カーテンを気づかれぬように静かに締めた。ベッドに戻ろうと
 した次の瞬間「この朝を失ってはいけない」と決心を変えた。
 玄関に走り庭に飛び出て、門に駆け下りた。戯れるチャビを押し
 のけ門扉を越して樋田の手を取った。

「翔、遅くすぎはなかった。まだ夜は明けていない」
 「ずいぶん待たせた、やっとサキに会えた。でもこの門を私は越せ
 ない」

「なぜ、私、翔を一晩待っていたのよ、開けるわ」
 「開けるその手を樋田は止めて、

「なぜかと言えない、私は今日も、これからこの門を決してくぐ
 らない。サキと会い、話すのは今が最後だ。お前を背いた翔を許し
 てくれ、翔を忘れてくれ」

握る手を握り返した翔の手の焼ける熱さが背信の意味をサキに伝
 えた。そして翔の胸に差されたバラの輪。そのバラこそ昨夜、サ
 キが花束にしてアキコに配達した黒バラ、ペルルワールの一夜だ
 った。花弁は萎れていた、哀れな萎れの見え様が翔のこの夜の顛末
 を知らせた。

翔はアキコに会った、アキコと愛を語ったと。全てを知ったサキは
 哀しみに堪え切れず、しゃがむ涙を足下に落とした。涙拭かず
 に立ち上がり、いまだ暗い西の嶺を望み翔に語り

かけた。
 「エクスにこもってもお前を忘れない。多摩でつき合いは三年、でも山々に私達の愛の姿を見せられなかった。この門をお前がくぐらなければエクスに来ておくれ。プロバンスの山と川、私とお前が手を取り合って並んで歩く姿をきくと彼の地の山に見せる。
 大学の棟、広場、回転木馬、花市場、噴水、カフェの張り出し、リラの繁り。エクスに咲くリラの木陰にお前を待つ」
 暗がり朝の風の一吹きに払われ、空が高く晴れ上がった。東に日が昇ったのだ。朝の日は差し込み、白い輝きがあまねく多摩の大地を照らし渡した。
 街道、線路、駅と街角、公園、丘に森、朝川、それらが昨日まで在った位置にそのままに、再び朝日に現れた。視界の果ての西にそびえる多摩の山々にも朝日が届いた。頂、青い尾根と黒い谷、緑の森の山容が幾重にも重なり、西の空も白く輝いて日の戻りを喜んだ。
 サキは涙を堪え、残るしずくを袖で拭き取り、朝の大地を見つめていた。翔は立ち上がりサキと並んだ。門の内と外で肩を寄せ晴れ渡った多摩の朝を、夜の悔悟を振り絞って見た。サキが「サントビクトワールにかならず」と小さく翔に呟いた。
 それはプロバンスにそびえるミトウ山で、その頂に翔との愛の姿を見せるとの決意だった。二人の背に、そして脇のチャビの背に朝日が暖かく射し込んだ。
 (ツンプクツ了)